

郎路生麻◇幹主

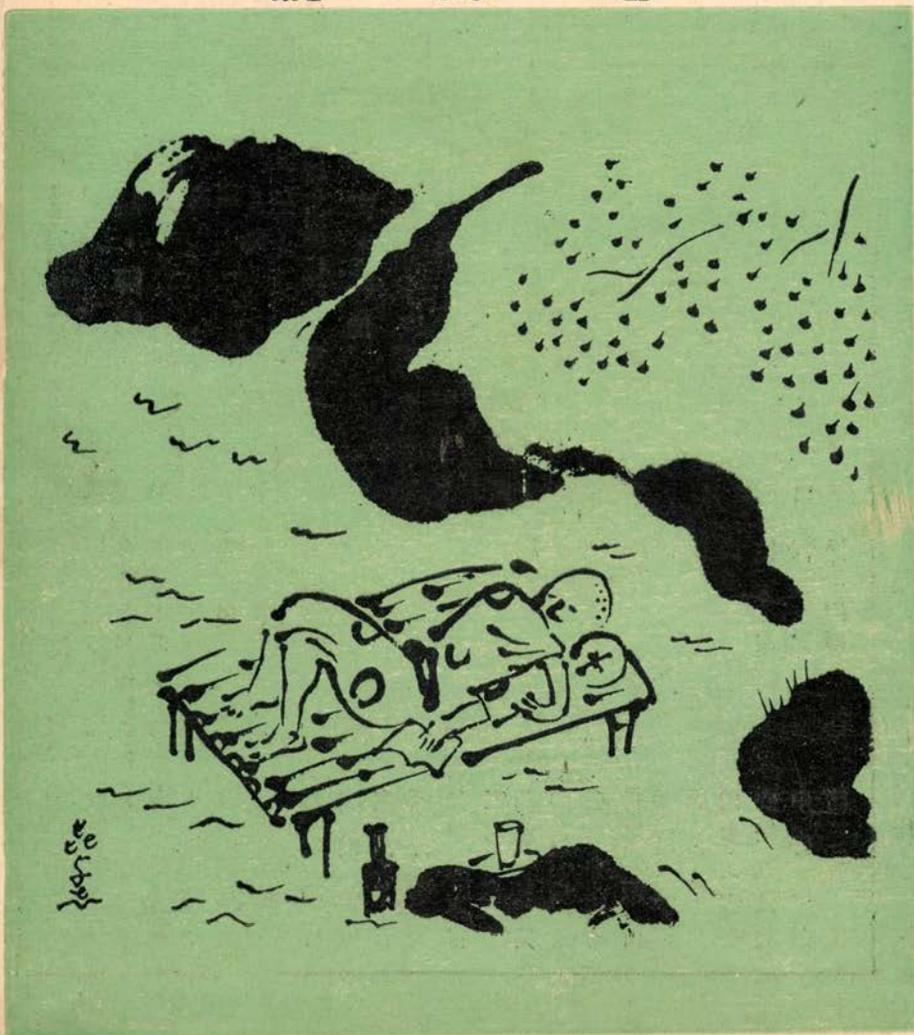
川柳雜誌

號 月 七

大正十三年三月三十一日發行
昭和二年七月一日發行
每月一回一日發行

川柳雜誌 第四卷第七號

川柳雜誌社發行



本社七月例会

◇日時 七月一日午後七時
 ◇場所 大阪市南區清水町停留所
 西入北側 端の坊
 ◇兼題 「水泳」 三句
 ◇會費 貳拾錢

本社の移轉

本社は去る六月八日に左記へ移轉いたしました。
 大阪市西成區千本通五丁目七番地
 (南海線岸の里下車西北九丁)

但し事務所は従前通りです。
 川柳雜誌社

各地支部増設

本社は川柳の社會化を實現させるため
 全國各府縣に支部を附設いたします。柳
 界のため且又「川柳雜誌」のために眞面
 目に支部幹事を引受け、協力「川柳雜誌」
 の擴張運動を援助してやらうといふ川
 柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨
 を申込まれたい。

暑中見舞の廣告を募る

川柳家の交誼を一層深めるために暑中
 見舞の實費特別廣告を利用して下さい。
 一口金五拾錢 幾口でも申込で下さい
 一頁希望の方に限り金五圓一口分の原
 稿は名刺がばりに願ひます 廣告料は前
 金の事。申込期限七月十日限(規販)

川柳雜誌 第四卷第七號目次

感想・評論

病床獨斷語(一)
 耳さ眼
 哀傷篇
 下らぬこそ讚美
 大阪に居た頃
 下らぬ話を川柳に話

研究・其他

柳樽(二十四篇まで(五))
 評釋(二十四篇まで(五))
 川柳略語解 追加の(二)
 私祖先
 生業の古川柳(二)
 句と話(支部柳話會)
 川柳漫畫 累卵の遊び(三)
 鎌倉江の島見物

▲募 集

鱗 染直し
 公 用
 本社六月例会
 六風坊忌

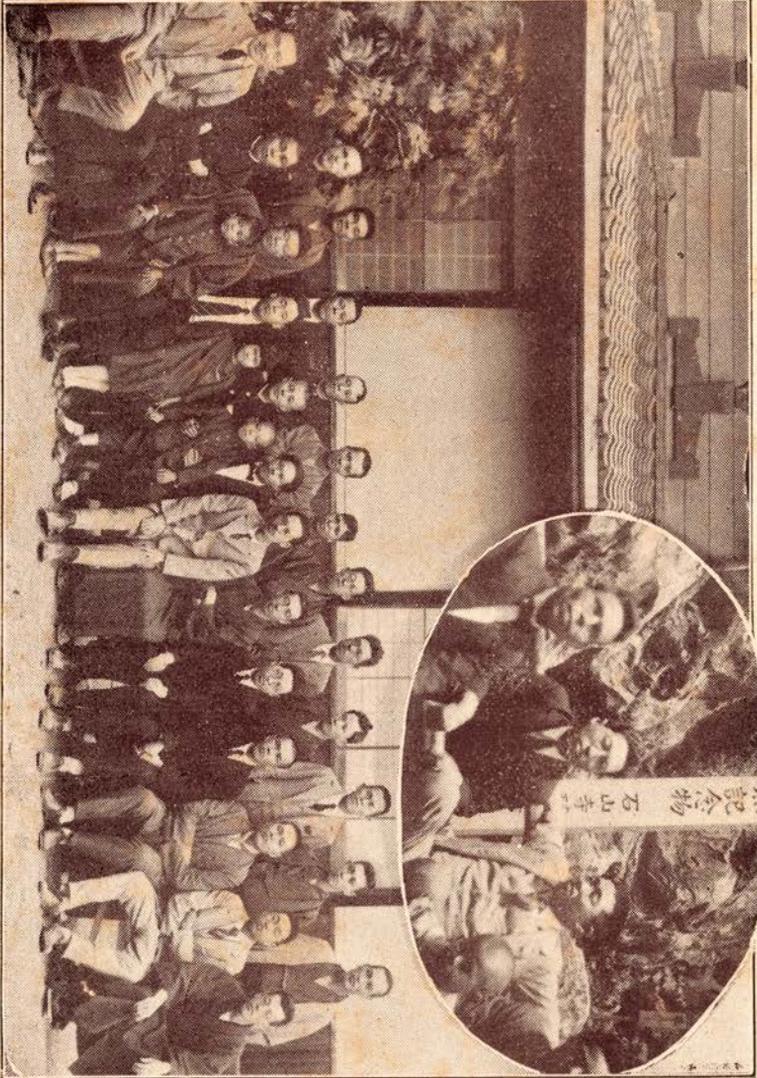
各地柳壇・川柳書架・川柳家戸籍調
 溪流午睡(表紙)

編輯後記
 題 字
 吉 田 清
 小 出 檜 重
 路 耶 生

創 作

木村半文錢
 富士野鞍馬
 高木夢二郎
 庄萬よし
 酒井駒人
 三好革郎
 川柳塔
 石賀馬行
 岩崎柳路
 庄萬よし
 酒井駒人
 矢田右大臣
 三好革郎
 西本三笑
 西垣松雨
 奈良井仙坊
 喜田飯山
 横田眠聲
 松本助六
 橋本二柳子
 安川久流美
 中野柳陽
 諸 家

吟 妙國寺から潮湯まで
 五月二十二日濱寺支部主催の下
 に昇吟行を試む(會津藩)大濱の
 家族濫暴にて撮影、前列は、形秋、
 弘石、飯山、馬行、松原、
 路那主幹、双柳、元次郎、朝陽、
 とし子、柳骨、彌助、秋晴、眠聲、
 松雨、後列
 右より、辰車、源坊、孝永、かほろ、
 一醉、醉夢、舟々、春陽、二柳子、
 萬よし、
 則六、鶴善の諸氏



吟 近江八景
 五月二十五日琵琶湖畔に吟行を試む(會津藩)十字路君の御
 前に存在を見せ、菅原君の頌が動いてゐるのも愛嬌の一つ、
 近江の光線が感かつた譯ではない、と彩秋の説明つき、向つて右より北山十字路
 北山喜一、田中紫秋、石真馬行、北山悟郎の諸氏





近作柳樽

路郎

選

直立不動で伸びる竹の子
坊ツちやんのお年をきくも世辞の内
さうくればかういくさいふへボ将棋
抜いて見りやこれんほつちの指のさけ
芝角力腰を撫でく起上り
角兵衛獅子骨があるまは思はれず
自動車を降りてこゝからいゝ景色
一 直線に十六の戀
足の爪切つて今日からセルになり
鱗もうへラへラへラミ沈むなり
運轉手君赤靴も破れたねに
隣が空いてきたまの井戸の音
逃げたなき思つた蚤は逃けてゐた
幼稚園うちの子供はあの頭
免職の時はさきつさくるであろ
電柱を降りてしばらく別な風
しやがんでるま娘の胸の帯

故郷へ歸りて二句

山 梨
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
大 阪
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
山 雨 樓
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
天 花



洋服が似合ふさいふも親心
 新折る母のその手に氣がつまり
 鳩の目にあまる向のビルヂング
 心にもないシヤンペンの乾盃の
 歸らば坐り得ざりし友なりき
 言ひたらぬこそが道々分つて來
 寺の畫みんな留守かと思はせる
 水打つた三葉八百屋で科をかへ
 ご寮さん云はれこそわり兼てる
 恙なくバケツへはかる米の嵩
 履歴書を出した氣持を忘れてる
 母何んの樂もなく拭掃除除
 勝敗は目的ませず敗れたり
 強烈な香吊皮花を持ち
 冷し飴客があらうがあるまいが
 空間をみつめ淋しいこそ思ふ
 つばくろの運んで行くも春の土
 有るここには有りすぎるとは金のぐち
 春の日のうちらの母の針仕事
 これ丈は飲めども云はぬ財布なり
 こんもりと高い乳房の上の帯
 うぶ毛陽に透いて水蜜桃の頬
 紙屑のやう木枯の町を抜け
 マソヒスト然こかまきり喰はれてる

同同松同同同同同廣同同同同魚同同同同同同同同同同同

江 島 崎

同同町同同同同露同同同同同亂同同同同同光同同同同同舟

二 斗 耽 路 々



人様の屋根は雀思うてす
 カフエーで逢うても活辯同じ聲
 おほろなる中に子の愛のみ光り
 よき人さのみきく母のしたはしく
 プラットを金魚のやうにひるがへし
 路次を出る下駄は髪結らしい音
 子の手前毒にしておく父の酒
 あれまでに云へば悴も馬鹿でなし
 命さへあればさ父のやせた腕
 道普請今日もそのまゝ雨がふり
 公園の電氣まぶしく二人居る
 奥様の口から國の訛が
 よく泣いたこども佛へ手向なり
 生活に何の足しにもならぬ筆
 繼母さなり中年の戀かなふなり
 眼を閉ぢてしばし浮世に遠ざかり
 タイピスト幻のまゝ手を運び
 肩書の眼に人生の生易し
 有餘る金にためらふ事もなく
 結局は香のものにも箸がつき
 眞實の腕が見られる意地になり
 校風に反く姿で友に會ひ
 親友の頼み甲斐ある煙を吐き
 立上る序に隠居掃いておく

五

同 同 神 同 同 同 石 同 同 同 京 同 同 同 大 同 同 同 御 同 同 同 廣 同
 戸 川 都 阪 影 島
 同 同 二 同 同 同 岳 同 同 同 文 同 同 同 彩 同 同 同 柳 同 同 同 羊 同
 南 柳 錢 秋 秀 司



鐘詰を切るもうれしい一つなり
 竹の子をむくのに話つきません
 バッスした時は母子が連立つて
 やはりまだ若さのため人は云ひ
 抱いてるやうに開いた豆の花
 恨しさ銀行の戸を見て歸り
 預金帳書いた数字が伊達になり
 親らしい子供が清書見やおやり
 腰掛け代表今日遠慮せず
 兄弟には癩癩持で通るなり
 一寸したこも嬉しい旅の宿
 高女展母親らし、立去らず
 情死に貸ボートだけ流れてる
 来たばかり鮮人みんな白いこ
 愛の巢を壊しに父がはるばる來
 群集に押しされ押しされて手をはなし
 古本屋讀んでるのを尋ねられ
 父さんが絞るミタオル水が落ち
 萬引で知らず其處の道をあけ
 病んでてさへも憎まれ口を利き
 エブロンを外して僕を送つて來
 そんなら母はへそくり出すならん
 掃いてる丁稚小説落しがけ
 許嫁母の病氣に來てくれる

七

同 同 大 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 阪 阪 池

同 同 翠 同 同 同 千 同 同 志 同 同 炭 同 同 刀 同 同 水 同 同 籬 同 同
 四
 峰 鳥 郎 車 郎 郷 楓



目の上の瘤を歸して先の用を聞く
 それからは出て行くから語り
 言ひ種に腹の底から湧きかへり
 膠歴書へみんなの智恵で嘘を書き
 繼母の言はずほめぬくいちらしさ
 處女さいふ派手な襦袢の袖が見え
 決心を父は眞からあざ笑ひ
 公用を果して空へ息をつき
 土用干喪章のついたまんまなり
 信じてる母は黙つて金を出し
 活動から忍術丈をおほて来
 あれもこれも買つてやりたい父さなり
 油断なく廻る小才に親爺ほれ
 五六間下つて牛をやりすごし
 わが事のやうに母親聞いてる
 元氣よく帳簿を閉ぢて晝に行き
 圖星さゝれて氣味悪いに易
 金鎚も世帯道具の味一つにて
 朝起の兒に細帯の女の親
 名僧へ昔の友が訪ねて來
 親程に階級がない社宅の兒
 登山好き死ぬにもやは山で死に
 鯉 職 鎮 五月六日驛の家族會にて
 ぜんざいの中へさくらの花がちり
 この顔でさ思へぎ吳服屋そらさない

西	同	安東縣	同	長野	同	神戶	同	京都	同	栃木	同	石川	同	別府	同	大阪	同	松江	同	同	同	神戶	同	同	同	草
笑	同	花	同	高	同	芳	同	京	同	照	同	北	同	童	同	萩	同	清	同	同	同	嶺	同	同	同	明
人		蝶		峰		香		子		郎		葉		人		翁		磨		宵		月				



一決心を腰の矢立に見せて居る
 一緒だつたのはほんのふいに
 あなを朝から出た夢にだけ
 公園を梯子を無駄にかけたま
 絶壁へ梯子を無駄につめた
 風船屋自分の息をつめて賣り
 蘭鉢へかきむ選手の殻卵
 あまりの学力秘めて友は近き
 羊かんの終らぬ内方に船が着
 國の自慢終らぬ内に船が着
 親の目終らぬ内に船が着
 もう年寄ださ言ふに子を借衣
 夏休からさ言ふに子を借衣
 死んで行くまで戀も出たぬ
 學力の程は戀も出たぬ
 別荘へ生れかすつても見たり
 鳥かごを吐き先塗つて居る
 大生徒に立退き先塗つて居る
 大坂を立退き先塗つて居る
 親も口を少しき氣象を口へ出
 告げ口を少しき氣象を口へ出
 船世帯橋をかまはすつてゐる
 足跡を可愛が妾の食つてゐる
 女房の可愛が妾の食つてゐる
 未亡人の勧誘員を強に渡さける
 何時虫が出たか分らぬやうに
 茶二匹の生南虫に二時を聞く

九 上石戸大豊加神横同同同大 同盤同大同大同大 同安同丸同伊同
 海川畑阪橋賀戸演 阪 池 阪 阪 阪 同東縣 龜 勢

素一重醉綠太郊夢三毒よ伴督同昭同月同正同喜同句同柚同鶴同
 公 日 し の 留 蘭
 人魚夢朗坊村入坊仙江内字 朗 仙 治 久 若 坊 美



病床獨斷語

(二)

—柳界の歩みと流れ—

木村半文 錢

斯うしていろ／＼と考へてみるに、川柳の創生から歩み方は可なり日本文學史上に、異彩を放つものであることを知る。單に、俗文學としての存在でなしに、その含まれたる質的價值には、一般人の豫想を許さないまでの文學的要素があり、特異な立場があるのである。江戸ツ子の氣質を現した彼の「江戸ツ子は五月の鯉の吹き流し」の狂味や「宵越しの金をもたぬ」といふ俚諺や、なるほぎ江戸の市民性なるものに當てはまるやうでもあるが、それがあるが故に、川柳なるものゝ淡泊性や機智や洒脱味が浮び上つたのであらう。江戸の都市としての限定的な發達進路は斯うした性能の持主たる江戸ツ子によつてのみ可能性を有する事になる。それは彼等の生活の必然性であつて、「川柳」は當時の社會なるものを、今日まで如實に残したのである。繪畫はなくとも、文字によつて寫生したのである。

こんな状態で、江戸の市民に歡迎された川柳即ち柳樺熱も、初代川柳が寛政二年に歿して、其の子が繼承して二代川柳となり、文化元年に歿するまでには、六十編といふ夥しい冊數を重ねてゐるが、その内容は下火になりつゝ俗化して行つた。さしもの江戸ツ子も、少々鼻につきかけたのであらう。殊に一方には、景物を目的とする群衆心理を利用して、前句附、冠附、眷附、上下、もちり等の、元祿期の大流行以來の勢力を持ち續けてゐたのがあり、果は大宰春台をして「獨語」の中に嘆息せしめた「和歌の流、其の末變じて博奕なるべし」とは、往古玉津島の神も、いかで知しめさむ」の本尊三尊附なごも、嚴しいお奉行の監視の眼を潜つては、窃に興行を續けたものがあるかも知れぬ。だから疑へば、その方へ幾分のお客を吸ひこられた事にもならう。が、何と言つても「妙さや言はん徳さや言はん」

の初代川柳の權威が物故したのであるから二代川柳が如何に努力しても、飽れる時期へ這入つたのだから、江戸ツチの川柳熱も下り坂たる事は否めない。全く歩み方は惰力であつて、漸退的にも見へるやうである。量の方面より質への展開がありさうに思へるが却つて質はドカ落ちに落ちて了つた。二代は所詮初代の傑物に壓しつぶされる運命でもあらう。殊に、寶曆、明和に極度の發展をした川柳は、もう江戸の市民の手では、あれ以上の進み方、展開方法が講じられなかつたのであらう。芭蕉を失つた正風俳壇が漸く月並に惰して行つたのを比較すると、同じ經路を歩んだらしい。狂歌なごも蜀山人や朱樂管江や唐衣橘州なごの安永年間の勃興時代より、文政年間の漸退的な現れを見るも、其の軌を一にしてゐるやう。全ての文學が、江戸へ移されて、茲に急激な進歩となり、完成を遂げたのであるから、以後の文學が衰運に向ふたのは當然な歩み方である。高調に達したものは自然に平調に歸しなげばならなかつた。

元祿の文化は、斯うして發達しつゝ、やがて反動的な墮落期に這入つたのであらう。殊に川柳の上で見れば、何んとしてても當時の川柳即ち柳樽の中には、俳諧や和歌から直接に影響をうけた文字の洗練味があつた。都市生活を耽美する感情の素朴なものがあつた。生活より衝動される自尊心の具現もあつた。戰國時代の厭世思想より、急變したる樂天主義の現れもあつた。

其の他いろ／＼に價值があつたのであらう。この川柳の自由な空氣や開放の氣分は、だん／＼年と共に俗化して、柳樽の冊數を徒らに重ねるだけで、二百年以來も沈衰し切つたのは、寔に惜しむべき結果である。俳壇に於ては、例の蕪村や曉臺の手で天明中興期が畫されたが、川柳には、もう反撥するだけの彈力がなかつたやうだ。初代川柳のやうな點者としての權威者が出なかつたのにもよらうが、川柳を繼承するものに威嚴がなく、景物本位の、お華客第一の、興行化したのに原因することは勿論であらう。「正道」なるものも、漸く眞沙汰の偏重に陥り、作者の道徳性を惡化させたものであらう。初代川柳を中心として展開した進路が、その二代、三代、五代に及んで、川柳の作者たる愛好者にまで、その點者としての位置が引き下げられて、歡心をひたすらに買ふ態度にまで低下したのである。權威が失はれて惡化したのだ。

彼の五世川柳の決定した三傳へる「柳風式法」を見るに、その第五條には敬神、愛國、道徳なごを目標とする事なごが歴然と約定せられてゐる。見方によれば、それらは漸く嚴しい奉行の取締に對する現れであるとも考へられるが、さりとて川柳の發達した動因を無視した、この「柳風式法」なごは、明かに逆轉である。淫蕩文學の反動が常識的な道徳主義を生むのと同じやうである。六世川柳が五世川柳の十七回忌追悼會の時に、

選んだ高點句は「勵め人昨日の蚯蚓今日は龍」「御車も牛を馬に開化の世」なごである處を見れば、如何に激變したかを知るべきであらう。洒脱や皮肉や輕快味は、完全に追放されて了つて、さり代りに常識的な教訓にまで及んだのである。これは江戸の市民性が、久しい逸樂に耽つた反動として、自省的な境地に到達したのであらう。こゝは、幕政の經濟的消極方針に移動せられた、當然の成行を見ても思ひ半に及ぶものがある。彼の新當柳樽を始めとして俳風柳蔭や狂句梅柳や降つて滑稽發句類題集等の幾多の同種、同趣味傾向の書物が市場に現れても、俗化するべき運命を抱いてゐた川柳には、何の新興機運も與へずして、天保調なる月並思想は、滔々呼さして渦を巻き立てた。俳句、狂歌なごの親類筋も、みな一樣に天保潮流に押流されて了つた。

江戸の基礎的文化が、元祿に完成され文化文正に爛熟の頂點に達するに共に、天保時代の俗惡時代に眞逆様に墜落した。もう、江戸の市民も、その江戸を建設した意力も理想も忘却して反動的な悲觀時代に這入つたのである。消極的な生活を、そろ／＼營むべく、餘儀なくされたのであらう。川柳は斯うして江戸市民の手により、江戸に限定されながら天保時代に這入つた。もう江戸市民の手で、川柳の新興機運は絶望させられ、僅に餘脈をもち應へながら、遂に維新にはいり、江戸は東京ミ

なり、將軍の治世は、天皇の治世に還り、全ての基本的な組織が一變した。権現様を先祖にもつ江戸ツ子としては、維新當初の不平等が窺知されやう。淺黄裏ミ惡罵した國侍が堂々ミ乗り込んで、江戸の天下を我もの顔に占有したから、江戸ツ子の自尊心ミ潔癖性は極度に歪められ、排他主義は思ふまゝに發揮された。江戸市民は、上下を通じて此の時ほごの侮辱ミ脅威を受けた。こゝは、三百有餘年間に亘る歴史中、他に一度もあるまいと思ふ。江戸ツ子が江戸ツ子としての權威は、この時に於て蹂躪された。維新後の東京市としての發展は、少くも他國人の多くを迎へ入れた。もう、江戸としての限定された領分ではない。明治の文化を搾取しながら、新興榮運の日本國民を代表して、一大精神的躍進を遂げた。だから、今日で云ふ東京市民の江戸ツ子なるものは、維新當初の混血兒江戸ツ子が可成り多く純粹の傳統内江戸ツ子は、約半数以下に減じられたのであらうと思ふ。殊に、地方民を多數引きつけて、東京市なるものが形成されたのであるから、江戸ツ子ミ稱しながらも、田舎種が可なり多數あるらしい。

此の新しく組織立てられた東京市民が、東京市に在住するが故に、江戸ツ子優越性をふりまはすのは、少々當て嵌らない。東京の改稱と共に江戸なるものは、根本的に覆へされて了つて一部の特殊階級ミ民間の傳統的生活者のみが、江戸趣味を抱有

してゐたのであつた。其の他の市民は、風來坊であり、田舎者でもあつた。だが、例の開港と共に輸入された文化は、いち早く東京市民の手に送られ、そこで江戸ッ子田舎者の渡來者この手に、協同的な運動が起つて、明治、大正へかけての王城の地さしての建設はなつたのだ。

川柳は斯うして、明治年間の久しきに渡つて、天保傳來の狂句萬能を演じた。殆ど文學的に見て三文の價値もない駄洒落や考へ落ちやバレ句に終始したのである。彼の「柳風法式」なぞを作つて、人爲的に點者としての權威を確守せうとした五世川柳以後は、形式的な川柳名目の繼承に終つて、實力本位でなかつたから、天保制度の俗趣味を排斥して、そこに一脈の生命を見出すやうな、具眼者もなかつたのである。腐り切つたものは、そのまゝ、自棄的な歩みをつづけて、遂に、川柳の聲價をして、極度の下位に墜こしてつたのである。痛烈な皮肉や、辛辣な諷刺の發見せられる、寶曆、明和時代の川柳の實質的價値は、天保以後明治に亘つて、七君子の口にはほすべきものでないまで、冷遇された。邪氣のなかつた江戸市民も、此所に至つては苦笑を禁じ得まい。亦、吾々が見ても、明治年間の狂句萬能式は、いかにも俗悪であり、鼻つまみであるかを知る。殊に、この俗悪な狂句が、江戸のみに限られずして、地方にも版行されたことは、江戸中心時代の内容に比べて嚙江戸ッ子の有

識者に残念に思はれたことであらうと推察するに難くはない。

明治の末葉に及んで、當時の新聞に「柳壇」なるものが設けられたが、その孰れも狂句である事は申すまでもない。劍花坊氏の日本新聞柳壇なるものは、その尤なるものであり、亦狂句の挑梁を徹底させた代表者でもある。此の狂句復興機運が地方に波及して、各地の新聞柳壇なるものが續出した。日本新聞を狂句を漫然摸倣したものである。もう此の時は、川柳なるもの、量的發展が、東京を基點として、各地に分布されたもので、今日の川柳雜誌の刊行や川柳團體の組織關係を、既に孕んでゐたものである。即ち、江戸に限定されて發達した「川柳」が、地方へ送り出されて、茲に、眞に開放的な、自由な、川柳道の芽生を營むことになつたのであらう。江戸の川柳は、日本の川柳にまで量的發展をしたのである。斯うした機運を作つたのは、江戸の市民が一部の田舎者を混和してゐたから、郷土人の關係上、だん／＼地方にまで移植されたのもあらうと思ふ尤も、その著大な發展ミ移植が行はれたのは、明治文化が機械的に躍進した、その文明治下の交通の賜物でもあらう事は勿論である。

けれども、川柳が本質的に江戸趣味を唱へ出して、狂句の分界を見定め得たのは、久良岐氏一派の「五月鯉」刊行なきが預つて力があらう。川柳をして、狂句の批判的區分をなさし

めたのは、久良岐氏の運動に顯著なものがあらうと思ふ。劍花坊氏の手にも、古川柳の研究が行はれて、茲に狂句に墮落した文學的位置を、挽回すべく戰つたが、天保以後の悪名は却々容易に拭ふべき便もなかつた。

殊に、顯著な現れであるのは、當時の川柳作家が筆名を用ひ出して、堂々々作者名を現はしたこゝである。そして、その筆名の多くが、やはり狂句式なオドケたものであつた事は明かであらう。狂態が依然として川柳作家にまで、こびりついてゐたのである。これは新聞柳壇の應募に匿名式なオドケを筆名とした關係もあらうが、専門雜誌へまで、此の全勢をのこしたのは川柳と狂句の區分が判明しても、狂態意識はドン底にまで根を下してゐた事の一つの證據でもある。

明治の文學が、日清戰爭を前後して擡頭した。俳句なきは正岡子規のやうな傑物が現れて、天明以後の沈衰を打ち破つた。川柳も亦、狂句を排斥して、寶曆・明和の復興運動に這入つたが、俳句のやうに容易に浮び上るがこゝが出来なかつた。これは、久良岐氏や劍花坊氏の力が不足したのではない、俳壇の子規に劣るにしても、充分の力量はあつたのだが、不幸にして、久しい間の狂句で受けた悪名は、さう手取り早く拭れるものではないさちらかいへば、俳句や短歌に比べて、入り易いさいふだけでも、一般の民衆の手に充分に歡迎されさうであるが

却つて、量的に劣るさいふのは何故であらうか。良家の子弟に近づくこゝを忌まれたのは、狂句の崇りであるこゝは否まれないが、一方に寶曆・明和へ還らうとする運動が、既に、根本的に誤つてゐたのではあるまいか。江戸を失つた東京の川柳家は江戸趣味・江戸生活なるものを、幻に描いて打ち建てやうとしたが、既に、その唯一無二なる江戸の土地は、むかしの享樂を追ふには、餘りにも激變してゐたのであらう。江戸の氣分なるものが、東京文化の機械的歩みに壓倒されて、全然、別なものゝ江戸氣分を、生産せなければならなかつたのだ。時代の潮流こいふものは、川柳家だけに、特殊な江戸を残してはくれなかつたのだ。破壊より建設に向つた東京市民の文化は、斯くして、凡ゆる歐米文化を攝取したが、攝取すればする程に、精神的文化は機械的文化に移さなければならぬ必然の結果にはいつた。物質に淡白であつた江戸の人々は、生きねばならぬ當面の問題に即して、やはり普通人と同じやうに、金の有難味を知つたのである。

川柳の地方的分布は、そこに、川柳の特質たる江戸を無視した、地方的川柳が擡頭した、江戸辯の川柳に對して、田舎訛りの川柳が現れた。そして、此の地方的集團なるものは、可なり多數を數ゐるやうになつた。(未完)



柳樽
評釋

廿四篇まで

(五)

麻生路郎

(三) 初篇の句 (續き)

京の祇園祭、大阪の天神祭、江戸の山王祭を日本の三大祭と云つた。江戸の山王祭は將軍家のお膝元のお祭だけに祇園祭や天神祭にひけをミつては將軍家の威光にもかゝはるまいふので特に町奉行では各町の町役人を呼び出し「本年は山王の本祭であるから盛んに執行するやうに」命令的に云ひ渡してゐたものである。さうでなくともあそびずきな江戸下級民がみんなに騒いだかは想像に難くない。

迷惑な顔は祭の牛ばかり

牛は黙々として山車を曳いてゆく。そこには疲勞があるばかりである。氏子の町内では囃子臺まで設けて、ちやんちきく

騒いだ。江戸の祭の華やかさを誇るかのやうに。

辻切を見ておはします地藏尊

ぼつこ血煙が立つた。新身の一刃がためされたのである。無法者は莞爾として笑つた。刀は再び鞘におさまつた。六道能化の看板をかけてござる地藏尊が、それをただ黙つて視てござる。こいふところに皮肉がある。寂しさもある。

晝買た螢を隅へ持てゆき

青い蠅がまだつりつぱなしにしてある。

「ソラ、御覽。よく光るでせう」

こいひながら晝に買つた螢を部屋の方へ持つて行つて光らせてゐる。そして日の暮るまで待ち遠いのである。

死に切つて嬉しそなる顔二つ

心中の句。現實に生きるにはあまりに弱く二人であつた。

二人は遂に死を選んだ。安住地をそこに見つけやうとしたのである。肉體的に亡ぶことは眞に生きることに外ならなかつたのだ。

引越しのあとから娘猫を抱き

引越しの道具類を高く積込んだ車が幾臺も續くうしろの方から、娘が、いかにも可愛くてならないと云つた風に猫を抱いてゆくところに何さなく娘らしさがある。そして宿替といふものをのんびりささせてゐる。寫生句としては巧な方であらう。

火貰ひのふきく人に突當り

一寸そこまで出た間に火種がなくなつた。ほくちからいこすのも今更大儀だからお隣へ火種を貰ひにゆく。

『毎度すみませんネ。それではいたゞいてゆきますよ』一つの火種のおこり炭をはさんで歸る。途中、ミもするご消ねさうになるので、大事に吹きく来るミ、向ふを見ないで歩くので忽ち人に突き當つた。火種は落ちて二つになつた。

本ぶりになつて出て行く雨やざり

今ならば夏帽をかゝゐて走り込んだ軒下さいふどころ。

すぐにも晴れるだらうと思つて、待つてもくなく晴れぬだんぐ／＼落ちついて来て、ミう／＼本降りになつてしまつたこれでは、いつまで待つても駄目だと思つて、諦めて雨の中をびちやく／＼濡れながら歩いた。今なら圓タクでも呼ぶどころであるが昔はさう簡單には行かぬ。

同じく初篇にある句の

傘かりに沙汰のかぎりの人が来る

のも、さうした時である。共に穿ちの句である。

長嘶さんほのミまる鑑の先き

發付の某が又々御加増になつた話、備前長船の名刀が手に入つた話。お部屋様の横暴が、近ごろでは全く頂上に達し、殿様はあつてなきが如きありさまたと、それからそれへミ談してゐるうちに大變長くなつた。供の槍持が立て、置いた槍も長く動かないから、その尖端へ蜻蛉がままつたのである。平素はおそろしい槍の尖端も長く動かないと、自然蜻蛉までが見縊つて

平氣でこまつてゐるのである。そこに一つのユーモアを感じたのだ。

言ひなづけたがいちがいに風をひき

許嫁の風邪はうつしたり、うつされたりで、なか／＼埒がわかぬ。自分の風邪が染つて寝てゐるに聞ひては、じつこしてゐられないで、少しでもよくなるに直ぐにこちらから出かけて行つて又もらつて来る。そんなところにも許嫁らしいさきめきがあるのである。

花嫁のぶするでないのにくらしさ

花嫁さいへば野暮くさいのが身上で、さこみなく粹を聞かされるに、反つてこちらでいたみ入るものである。すぐに、ハハシさては前生はさうなづいたが最後敬意を表したくても表せなくなるものである。

ひんぬいた大根で道をおしへられ

旅人は今、分岐點に立つて、右していゝか、左していゝかに迷つてゐる。恰度その時、霜の降りた大根畑の方に伸びたり、ちぢんだりする人の影をみこめた。旅人は大きな聲で呼びかけ

た。畑の人は旅人の行くべき道を引きぬいた大根でさし示した。野外の寒い情景があり／＼さうかんで来る。

片棒をかつぐゆうべの鰻仲間

昨夜一緒にふぐを食つた、そのうちの一人が毒にあたつて死んだ。今日はその葬ひであるが一緒にふぐを食つたよしみに棺の片棒をかついでやるさいふのである。しみ／＼とした句である。

雪ぞらの下を魔のやうにゆく、寂しい葬式ではある。

約束をちがへぬ紺屋哀れなり

紺屋の明後日さいふ言葉が生れたほぎ紺屋の約束はあてにならなかつた。それに、これは又約束のその明後日を間違ひもなく「ヘイ／＼出来て居ります」さいふ。いかに暇な紺屋さんであるかが窺はれるので、一種の嘲笑を浴びせたのである。

女房ご相談をして義理をかき

大きいか小さいかの違ひはあらうが、さこの家庭にでも起きる現象の一つである。義理も義理だが背に腹はかへられぬさいふことに落ちつくのである。穿ちの句。(つづく)

生業の古川柳 (二)

東京支部

川柳行脚中

岩崎柳路

蛭子省二

(九) 錦魚賣

錦魚は紅色の小魚池中及盤中にて畜し觀物とす三都とも夏月専ら賣之又金魚に異種あり形小尾大にして大腹のものあり常に尾を上首を下に遊ぶ京阪これを蘭蟲と云らんちうと訓す(中略)丸つ子朝鮮等貴價の者は三五兩に至る又此賣京阪は必ず各々白木綿の手甲脚半甲掛を用ふ江戸は定扮なし又京阪は金魚桶上に柳台利一ケを置く是皆旅人に扮する故也而も三都とも答畜之を制する元店あり。

現今でも金魚屋さん美しい聲で電車通りを呼び歩く。

らんちうと號しかへるツ子をあげけ
金魚賣これか〜とおつかける

(十) 稗蒔賣

稗蒔は初夏の比賣之、瓦盆に稗種をまき芽を出して四五分なる物に田家人畜の製物を置く。

ふり賣の田地に一羽鷲が下り
稗蒔の細工いかさき鷲のやう
案山子までついた田地が四文なり

(十一) 茄子苗賣

季春の噴瓜茄子芋ころもろこし等諸苗を畚七八ケに納れ擔ひうる

降りそうな日に茄子苗茄子苗
茄子苗なきだしそうな日和なり

(十二) 茄子賣

俗に三都とも八百屋と云やぢやと訓す又江戸にては瓜茄等一種を専ら採巡る者を前裁賣と云京阪にては是をもやおやと云其扮決定其籠も三都大同小異也江戸の近

村より瓜茄子等を此籠に盛し市に贈る是を前裁籠と云此籠五六を柄にかけ擔ひ賣るを前裁賣と云昔は前裁屋三百屋と大異今は粗相近し前裁賣は數品を携す瓜茄子の類或は小松菜等一二種を賣を云八百屋は數種を賣の名なり

茄子賣のこくがしまひなり

茄子賣二つ三つつつつかみ

(十三) 白玉賣

米粉を曝し製したるを寒晒しと云乾て此ごこく刻めり是は三都ともに乾物店等にて賣之也 白玉は寒晒粉を水をもて煉之丸めて湯烹にしたるを云白糖をかけて之食或は冷水に加之又汁粉加之と雖も陌上専ら冷水に用ゐるを専らとして夏月賣之昔は全白を専らとす數今は紅を交へて珠玉をなす者あり價百顆二十四文ばかり

旅立の形で白玉賣つて來る

(十四) 竿竹賣

衣服を洗ひ曝す竹竿を賣る故に四時賣之

雖いかにも特に夏なつを専もつす又夏月またなつづきはない竹たけの竿さへをも賣う詞ことばに「かたひらさほく」云い坐ま邊へ掛かけて夏衣なつあそびの汗あせを晒さらすに用もちふ竹たけ賣うをよけ々々さまざま舖たにの御使者おんしやのゆき

(十五) 插竹賣

插竹さしたけをも賣うり來くる乃すなはち擔端おんはに架か之雨滴あめだるを受うる具ぐ也俗よにこゆだけ或あるはこひだけも云い竿賣さへう插竹賣さしたけうにも肩かたにして巡めぐる

こい竹たけはまけてくる時肩ときかたをかへ一本いっぴんを片身かたみつゝ賣うる插竹屋さしたけや

(十六) 煤竹賣

十二月九日じふにがつにゅうにち頃ころより煤竹賣すすたけうが街まちを歩あく「四度目よどめの竹たけはのでたく黒くろうなり」「女竹おんなたけから男竹おんなたけにうつるいそかしさ」新宅しんたくは三年さんねん煤竹すすたけを入いれずなきの事こともある、

節無ふしなしの商人しやうじんの來きるせはしなき一人もの一なぐりださ笹さをかひ

(十七) 筍賣

竹賣たけうは子こをうる時はふしをつけゆるい黒木くろぎへ竹たけの子こをさしてくる

(十八) 蟲賣

螢あせを第一だいいちこし蟋蟀せせふ松虫しょうちゅう鈴虫しんちゅう蠶虫さごちゅう玉虫たまちゅう蛸たこ等ら賣うする者ものを賣うる虫籠ちゅうろうの製せい京阪きやうはん鹿也か

江戸えど精製せいせい扇形せんがた船形ふねがた等ら種たぐい々の籠かごを用もちふ蓋おほし虫むしうりは専もつら此屋體このやたいを階傍かいはたに居ゐて賣う也巡めぐり賣うこを稀ます秋あき季きには當季あきせうきの商人しやうじん夏冬なつふゆの如ごとく多おほからず

畫買えがひかひつた螢あせを隅ぐもへ持つてゆき大門だいもんを圍かこふ虫むしこいりかはり二三帖源氏虫賣にさんてつげんぢいむしう持つてゐる虫賣むしうのむこつたらしいうすか出

(十九) 鷄卵賣

鷄卵けいらんの水養みづやうを賣うる價ねだ大約おほむね二十文詞にじふもんことばに「たまご」こぞ必ず二聲ふたごゑのみ一聲ひとごゑも亦また三聲さんごゑも云いす因よこ四月八日しがつはつにちには鷄けいさあひるの玉子たまごを賣うるは俗言傳よこひことばふ今日家鴨けふけいあひの卵たまごを食たする者ものは中風なかつゆを不病ふびやうの呪のろみ京阪無きやうはんむ此事このこと也勿論もちろん生の卵なまたまご子を賣うり歩あいたる者ものはある握にぎり拳こぶしを目めへあてる玉子賣たまごう一聲ひとごゑこ三聲さんごゑは呼よばぬ玉子賣たまごうすががきこ玉子たまごで幕まくらがあき玉子賣たまごう酔よつたさ見てさしをいひ

(二十) 西瓜賣

西瓜すいかははじめ新羅しんらより琉球りゅうきゅうに傳つたへ亦薩摩またさつまに傳つたへる也寛永かんえい四年しよんねん始はじり皇國みやうこくに植うゑ萬治まんじ頃ころより江戸食えどく之の云いり一書曰いっしょくいつ昔むかしは西瓜すいかを食た

者もの奴僕やつやくのみ寛文かんぶん以後ごしよ十民じゆしんにも食たひ漸しだく貴人きじんも食たふ云いへり然しからば萬治まんじ以内い江戸えどに食たふ云いは奴僕やつやくに非あらず人の始はじめ食たふ也

西瓜賣すいかう矢や狭間さやまを明あて覗のぞかせる西瓜賣すいかう首くび實檢じやくけんのやうにもち西瓜賣すいかう冬瓜ふゆかをうつてよりつかず

(二十一) 自然薯賣

(二十二) 芋賣

こうはかつてはさ芋賣さ芋う三つさんのせ芋賣さ芋うのしまひは櫛くしに入れて持ち芋賣さ芋うへつるかけを出だし吐はられる

(二十三) 摘菜賣

摘菜賣てきさいう一歩いっぽだされてべそをかき囊ふくろの説明せみげにて足あるものは再びせす

(二十四) 菌賣

松茸賣まつたけうは山樵さんしやう直ちよく之の賣う或あるは八百屋商人やちやうしやうじんも賣う之の江戸えどは松茸まつたけ甲州かうしゅうより出でるのみ稀まれなる故ゆゑに此商人このしやうじん無な之の初茸はつたけ實じやく是こゝは亦山樵またさんしやう及び菜蔬さいしよ實じやく能よく賣う之の京阪きやうはんはつたけ無な之の京阪きやうはんの松茸まつたけ盛さかにして江戸えどの初茸はつたけは小行せうぎやう也はつただけは後ろ姿あとすがたを見せて賣うり

川柳 漫畫 累卵の遊び (三)

路 柴 舟 郎 評 畫

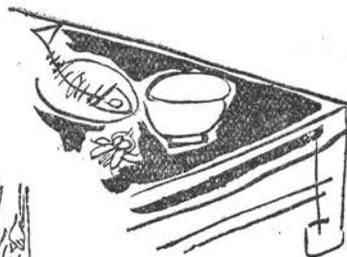
屈な部屋に恩人老い給ふ 凡平

恩人零落す。清廉なるが故也。潔白なるが故也。圓い卵子も切りよで四角といふことを知らざるが故なり。人の苦患を默視するに忍びず、之を援けんとして反つて溺るゝが故也。水清ければ魚棲まずの譬に洩れず、恩人遂に陋屋に躡る。寂しき世なるか。



末の子をあぐらの中へ入れて呑み 助六

愛は盲目なるがよし。晩酌は陶然たるに盡く。眼の中に入れても痛くない末ツ子をあぐらの中に入れてお父さんの上機嫌や思ふべし。「お父さん云つて御覽、お父さん云つて御覽」愚にかへる。又よろしきかな。



おそろしい怪氣であつた夢がさめ 柳路
 悪夢醒む。汗一斗の靦あり。我が家の襖忽ちにして
 眼に入る。これ第一の安心なり。さても怖るべきは
 女の執念なり。かゝる時に男は、これからは、決し
 てなきと思ふが常なり。されどその心を忘るゝ事も
 又速かなり。そは齒痛が止んで醫師を忘るゝにも似
 たり。

蠅だけの部屋に楽しげなる蠅よ 随帖

蠅曰く「人間は遂に我等を容るゝ雅量を有せず。人間は憐忍に
 して冷酷なり。某蠅も某蠅も人間に對し何等の危害を加はざり
 しに、その命を断たれたり。釋尊の慈悲、キリストの愛、そは
 人間の玩具に過ぎず。今人間は眠る。我等の世界なり。人間の
 ための珍珠佳肴は期せずして我等のための珍珠佳肴なる。
 憫れむべきは人間なるかな。」





川柳塔

○ 石 賀 馬 行

金魚大きく小さく椽の畫さがり
この邊り鮮人多し町端れ
基礎工事針の山ほご杭を打ち
俳人ご烏似た程閑があり
惠まれずまだ圖書館へ通つて居
向ふでは永い眼で見てるらしい
一豊の例をひいても妻訊かず
東西屋せりふの中の新智識
あつさりさお上は犬の値を決める
賀川服ちご見せつけの氣味で來る
佛壇放り出せが出て來る麗かさ

人生をあはゝくで片づける
交番の瓦をなでる柳の芽
葬式が出てばたゞ暮れる路次

○ 岩 崎 柳 路

石像が動いてる様なトラピスト
由良之助遊び疲れた日もあらん
竹の皮母は捨てずに待ち歸り
女車掌びよこく歩く面白さ
旅役者聲ひからびて老けて行き
いざ參るぞご阪妻は切りはじめ
寄席で見る西洋入の奴さん
親類を恨んで花を供へてる

庄 萬 よ し

○ お相手のテニスの夜を呑み歩き
勝つて来て相手を賞めるいい角力
未來派の看板かけて損つゞき
資本家の 酔ふても金の話なり
幹事への世話を仲居は別にする

○ 酒 井 駒 人

あの頃の仲居亭主を持つたさか
退窟の日にえさを引く蟻が見ぬ
料理屋のつもりで建てた家を借り
普請中仲居の一人 人 國 へ 行 き
目を脇へそらせば南瓜花さかり
笑ふ母さ笑はず子さへ新茶冷ぬ

○ 矢 田 右 大 臣

繫がれてから米をこぐ舟世帯
紹刺まだ出來ずに春も過ぎんミす
喇叭卒砂塵位はものミせず
洗面所夜行が髪を持つて來る
釣道具去年の帽子あつたはず

○ 三 好 草 郎

時々是我太陽を蹴飛ばさん
健康さ靴のかがきを磨り減らし

勉強をする氣圓本申込み
世の中の裏が分つて禿けちまい

○ 西 本 三 笑

藏へ来て父によく似た聲が出る
相談がある様に女からの文
御相談申すミ折れた債權者
酔ふて來た女形舞臺の癖が出る
電話口だんぐ、妻の聲になり
性慾ミ食慾橋で別れたり

○ 西 垣 松 雨

喜悲何れ小鳥は籠で啼いてゐる
女房が死んだミいつてほれさせる
名優に一字違つた旅役者
レツテルはめくれてビール冷めてゐる
乗替へを車掌は軽くうなづいて

○ 奈 良 井 仙 坊

寝てるれば故郷の驛に着いたらし
罪の子は誰やらさんによく似てる
繼母へ疲れた体でつかねてる
憶れてゐる事をば氣付く様にさせ
水郷を誇つて夏の句を作り

○ 喜 田 飯 山

行くこゝに氣のない方は腰をかけ

自分からもう老朽にしてしまひ
 佛然として夏帽をかぶつて出
 追分で亭主の方が道をきき
 實はそのなきに近くに来てすわり

○ 横田 眠 聲

判一つおせば寤てるて儲かる身
 神様のお告げ働け働けミ
 カイテンに少し風あり戀の唄
 學なつて親の意見に子はそむき
 頬紅のあかし夫は格氣をし

○ 松本 助 六

加茂川に憧れながら桑を摘み
 魚釣りを見てゐた暇の惜しくなり
 風ほめて居るへ西瓜を切つてくれ
 陽當りへ背なだけ出した洗ひ髪
 なんほでも世話のやきたい心太
 針の手に一口だけの蜜柑水
 冠られず捨てるに惜しい夏帽子
 涼み床譲り合せて團扇くれ

○ 橋本 二 柳 子

スタンプを押しく話續けて居
 實直に働いてまだ長屋に居

しんし張集金人の來たを知る
 すられたぎ財布の紐を見せてゐる
 今の笛にあご三時間ご知れる也

◇粒々集

金澤 安川 久 流 美

街の隅人ぞるるなり砂利の音
 さまぐの考へを捨て家に着き
 木に登る蟻の高さも生くる道
 銀行に預けた金が不安な日
 さうにでもなれきは金の無い話
 未亡人理想の裏が淋しかる
 呉服屋もあぐらをかけば賣れません
 町内の噂まごもに受けて生き
 走る雲天が動くご仰せられ
 善悪を交ぜて心の上へ盛り

大連 中野 柳 陽

うろたへてる真ん中を打ちぬかれ
 運命とする物すごい秒の音
 悲惨なり振子の足の松葉杖
 二の糸を打つに震へる三の糸

川柳略語解

追加の二

西原柳雨

鳴物にかけては平家おそろ也

(天明二)

こりや来たは大のおそろご封を切り

(明和六)

銀烟管おそろくも持つて遊け

(明和)

恐ろしをおそろご下略して云ふこも明和
天明以後の通語と見えて、洒落本なごに

も、ごうだ恐れ入つたかさいふ場合に

んごおそろかなさいふ語が多く用ゐられ

てゐる、此三句の一は盛の琵琶だの、敦

盛の笛なごはいはずもがな、笙篳篥や太

鼓や小鼓や管絃に掛けては皆々御手の物

であるごの義、こは紋日前に届いた馴染

女郎の文、三は同じく無心でもいはれた

若旦那でもあらうかと思はる。

にしが出ちや赤がむごいご村の母

(明和)

赤は赤子の略、今日でも赤子を敬稱して

赤らやんなごいふご同義であらう、句義

は嫁が夫に愛想を盡かして出て行かんご

するを姑が引留めて、其方が出て行つて

は後に残る赤ん坊が可愛さうだごいつた

ごならん、

屏風倒れておはつかご嫁はいひ

(柳樽三十篇)

おはつかはおはつかしの略か？

あゝらやうがましやご百さでしやれる

(柳樽三十篇)

よく喰らふ奴さご百さ入らぬご

(天明)

百さは百棧敷の略、即ち一人前百文の大
向の客、甲は三番叟の文句取乙は棧敷の
客がやれ菓子だやれ辨當だやれ餅だご、
のべつ幕なしに喰つてゐるのを見て涎を
垂らしながら、よくまあ喰ふ奴等だごご
煙草ばかりばくつかせてゐるお客である
因に記す柳樽三十編は初代川柳の選句を
集録したるものであるから天明代以前の
句なるごは明かなれごも何年號の句で
あるかは不明である、

いゝかんに衰に切りやれご太郎出る

(天明二)

いゝかんは、いゝかへんの略であらうご

前既に述べて置いたが、更に又一句の好

例を得たので補遺しておく、此句は竹屋

を渡つて北征をするかせぬかの評議が一

定せぬので、いゝ加減にして早く行くご

極めやうではないかさいひながら、向島

の鯉料理葛西太郎を出るごの義である。

句と話の會

東 京 支 部

川柳行脚の姪子省二氏滯京約六十日の間、其の半を疲勞と疾病に過され、今や中央線の某温泉に靜養を急がるるに際し、一夜氏の旅宿に同人訪問して送別の意を告げ、支部第二回の柳話會を兼ねる事とし、終電まで膝を交へた。

送 別

部屋の名残り灯の下に人と交り 千代二
又の旅を約して居心地の よき 柳 路

惜 別

薬瓶の一筋にこり雨あがる 省 二
例に依り省二氏に古句談を所望せしものを、
その儘々録す(柳路)

旅の事して書物はなし、二三求めしものは昨日來留守宅へ郵送済にて、お話しはる何にもがありません。古句にもある通り昔は間引く云つてパースコンツロールをやつたもの、山川博士の談に越後では淨土眞宗の感化影響をうけて、そう云ふ不道德な行爲を避けた結果、人口過剩を來し經濟上出稼の風が行はれたのだそ

うです。

あれは女郎弟は角兵衛じし (古句)
女は他國へ娼妓商賣に出たもの、明治時代でも吉原で越後女が高率であつた統計があります。

傾城にも越後の一トふじぎ (古句)

江戸ッ子も越後女にのろけ込むでゐたのだから、餘り地方人を下目に言へた義理でもない。

いちこの状にもぎこがしふさび (古句)

翻譯するに「越後の狀に麥炒一袋」でしょう。麻言葉の必要なもの當然ですね

男は
さまり木へ椋鳥ならぶ春 米屋 (古句)

頼まれりや越後からでも米搗に出る云ふ諺通りでしょう。近年は三助三杜氏が多い、包むで呉れた古新聞の一節に、「越後名物酒男は今が出盛り期で關東各

縣から引ばり風、統計ではざつと九百人の酒男が一シーズンに四十六七萬圓持つて歸るこゝになつてゐる、越後美人の方ははけたはづれでそろばんにのらぬ」云、越後の七不思議に、

角兵衛が國竹までが逆さ立ち (古句)

世に残る根つよき祖師の逆竹 (同)

直な法力逆さまに竹しげり (同)

親鸞上人關係の逆さ竹ですが、麻布山元町の善福寺にも逆銀杏があります。此の下が目塚であつたのであるが今は判らぬ。

逆さまな杖一ヶ寺の柱なり (古句)

上人が地にさした杖から枝葉を生じた云ふので高き十丈餘樹園三丈餘大きなものです、「古川柳三名木」を一度書いてみましょう、松が一番多いでしょう、大町桂月が「東京の樹木」をかきましたが一字も「榎」及びでゐない、榎は一里塚に

繁茂して旅人を慰めたもの、

和歌の國榎の間も歌仙なり (古句)

いやな句ですな。東京市内でも大木は小石川澤藏稻荷前の周圍一丈五尺餘でしょう、

「榎の僧正は餅屋のむこうなり」の

淺草傳法院の榎、王子の裝束榎、實は裝束島にありて衣裳榎云、毎年十二月晦日の夜諸方の狐こゝに集まりて火を燈す其影によりて其年の豊凶を占ふさいふ、落葉して裝束榎眞裸 (古句)

今は枯死してなく榎町の人家の隅に「裝束榎」の石碑が建てられ裝束稻荷の額のかけてあるお印程の社があるのみ、性的信仰の的になつて居るものも多々あります、千駄ヶ谷榎坂におま〇〇榎云つて例の徳川家のおまんの方が信仰されたこと傳へられて、古郷神社にも申してゐる。某大工が道具で其の榎を悪戯して歸宅するに妻女が子宮病に苦しむでゐる、そこで榎の事を思ひ出し崇りであろうと鳥居を獻納し漸く病が癒れたと云ふ所から、婦人病患者が參詣詣を亞ぎ、今では餘り房揚子を奉納する習慣が出て、あたり餘だらけなきは悪い洒落です。柳路さんのお宅方面としては板橋の縁切榎が有名で岡場遊廓考に近藤氏ト屋敷にありて大樹の榎街道に覆ひかかり枝葉繁茂す、いつの頃よりかく静せしや嫁人の人は忌嫌ひて通行せず、初めは觀望榎があつて

前者が枯れ榎丈けになつたさか、其の古木も枯れ、新芽が下から出たさ云ひますが病氣の爲め實踏出来ません、此の榎の皮を茶か酒に入れて吞ませれば縁が切れる云ふ至極便法で、現代科學文明の御代にもコンナ藥はまだ發明されない。

板橋の木皮の能は醫者に、もれ生木さく願は榎の皮をむき (古句) 夏の水の皮さ姑さを嫁うらみ (同)

社掌は杖を粉にしたものに何にか混ぜてお志で與へて居るさか、尤も近頃は御利益が推移して亭主が茶屋酒をのみ廻るのを足止めする、酒癖ひになる特効があるさか、之れでは夫婦和合の榎になつて本来の面目が失せてしまつた、藝者や妾の參詣が多いのだから、縁切縁結びミ兩方を兼ねて居るのかも知れぬ、金儲はこらがコツです、文久二年に家茂將軍へ和宮様が御降嫁になつたおり伐倒される所を、堀を圍らして助かつたのです、學友繪馬蒐集大家三井與之助氏が一日來訪、丁度縁切榎の繪馬珍品一枚を呉れました、御覽下さい。路郎氏の「柳樽二十四篇迄」の中に

指を切るからは九品の淨土迄 (古句) の解に指切の起原不明さあつた様でしたねウチに調べたものがあるのですが判然さは言へません。色道大鏡卷第六(續燕石十種第二)に心中部があつて放爪篇誓詞篇斷髮篇篇篇切指篇貫肉篇に別たれ

「指を切て男に報ずるは傾城の心中の奥儀さす爪誓紙髮斷此四ヶの心中は眞實ならすしてにも謀する業也、指切のみ眞實におもひ入たる者ならでは先なりがたし、此おもひ入たる内に二種あり、戀のおもひ入る身の爲めの思入さあり、戀ならずして身のためばかりにも指切る女郎おほくあればさてはかなきつさめの身なり」さある。京傳の「吉原揚枝」には指切道具を賣つてゐる事を書いて笑つて居る、遂には指を一升いくらで賣つた話も残つてゐます。泰平の修羅指を切り髪を切り (古句) 賞は指を呉れ罰はさんざりにし (同) 切指の法用一切るに治定したる時の用法先一間をかたまりてこもるに障子をあげ置べからず、介錯の人をかたらひ入口の戸をさしてかけかねをかくべし、しか

らぬ時は人のぞくべきかと思ふ心なられば
 決しがたきわざなり、切放つ三十人に九
 人はかならず氣を失ふ、此故に氣つけ血
 留呑水指の包紙等前廉に用意しおき閉目
 してきらする物也、切當は木枕を用ゆ切
 形にづぶ切、そぎ切にて二やうあり、古
 代にはそぎ切をしらずしてづぶ切のみし
 たり、云々（註）載つてゐる、大盡
 舞に「扱指きりの初りは角町にかくれな
 き薦屋の名取にふじしろの若さまが、こ
 づの與兵衛にきりそめて」なごあるが詮
 議はモットせねばならぬ

九尾よりはい女房の九本指（古句）

手練手管も並大抵ではない、自分の不注
 意が古句に放爪の事が咏まれてゐない様
 です、「放爪さば爪をはなすをいふ。こ
 の事いたしましたき業なれども是は男より望
 まずしておこなふ所作なれば初發の心中
 に是をの水」好色一代男卷之四二十九歳
 組念の事、今爰に美しき女の土華を
 女郎に爪商の權、今爰に美しき女の土華を
 掘返し、黒髪爪を放つさいふ何の爲にこ
 聞けば、上方の傾城町へ忍びて賣りにま
 かるこ語りぬ、求めて是を何にするこ聞
 けば、女郎の心中に髪を切り爪を放ち先

へやらせらるゝに本のは手管の男につか
 はし、外の大匠へ五人も七人も貴様ゆゑ
 に切る三女なきに包み込みて送ればもこ
 より人に隠す事なれば守袋なきに入れて
 深く忝なかる事の可笑や、こあつて内幕
 を知らぬが佛さばよく言つたものです。
 御覽の通り柳樽拾遺一冊より携帶せぬの
 で烏濡がましくもお話なきは出来ません
 東京も仲々復興致しません、神田の眞
 ン中に燒跡その儘になつて居る場所があ
 ります、橋ばつかりの復興だも悪口を言
 ふ老人がありますが木橋では大火災には
 役立ちません。辨慶橋が残つてゐるのが
 一層興趣を添えます。凝寶珠がメチャ
 ぐださ聞きますが、元三筋違橋淺草橋
 等のものを用ゐたのですから、マチ／＼
 でしょう。然し門は嬉しいのが残つて居
 る、赤門、華族會館表門、閑院宮家表門
 高輪御殿表門、紅塵萬丈の中の日比谷海
 城中學の表門なご永久に保存がしたい。
 上野の黒門は戊辰役の彈痕を止めたまま
 三輪の圓通寺に移されて居るそうです、
 久良岐氏から「先年研究不明なりし隠し
 町は市ヶ谷新見付外愛敬稻荷あり」云々

三書翰がまいりましたが、これは川柳吉
 原志にも書いてあり、大正十年出版齋魚
 氏の「足の向く儘」に「愛敬稻荷の隠町
 一」こ一項をもうけて寫眞まで載つて居る
 管です。岡邊遊草にも簡單に記載がある
 外、土踏むでみた、隠し町（古句）
 煩惱（同）妓夫蓋に香口のある、隠し町（同）
 土肥博士記念出版號の中に、醫學士土林豊明
 氏の、「江戸に於ける賣笑婦の地理的分布に
 就て」は川柳家にとつては今更珍らしい研究
 でもありませぬ、一讀の價値は充分ありま
 す、その内に、

愛敬稻荷

市ヶ谷教職院門前所在、此地は四六見世にて
 下等に屬し音羽に類せり、
 市ヶ谷教職院門前（かくれ里）下生、市ヶ谷愛
 敬、四六此淨土大低音羽に類す、人からは少
 しよき方（紫鹿子）、愛敬の君がゐるに氷藏
 愛敬（江戸順禮）
 時は十一時半省二氏に出題さ撰評を乞ひ句
 境に入る、
 知りつくしたい横顔へマツチの火千代二
 重れ着のシャツのホタンの黒い糸同
 朝からの客へ女房やみ續け柳路
 雨上り鯉の鉄なうるつりがなし同
 女給
 債券を買つた女給の針さかめ千代二
 兩帳を女給子の名で二冊もち同
 ほる、醉を笑つて女給は囁むである柳路
 寄せ書をし支關迄見送りを受けた時は、月が
 高く懸つてゐた（六月九日柳路記）

募

集

句

鱗

森 東 魚 選

嶮鯉一ト刷毛づゝに鱗出來
 剩金を出す魚屋の手に鱗
 魚籠の底鱗乾いて病んでる
 錦魚錦魚鱗をひけらかし
 眼の吊つた女鱗の帯をしめ
 鱗すれゝに金魚は行き返り
 網の目鱗を描いてのけ
 浪赤し赤し鯛網迫り來る
 鱗がエブロンに附いて世帯染み
 朝顔の鉢に鱗からび付き
 井戸端に鱗の目立つお朔日
 支那料理不思議なほぎに鱗突け
 釣舟の日向に鱗そりかへり
 血持つて待つ子へ鱗一つ飛び
 勝手口鱗をつけて猫がくる
 ゴム靴に鱗が光る朝河岸
 魚屋は鱗の落ちる帯をさき
 魚河岸に鱗の光る好い天氣
 鯉のほり鱗が馬鹿に大き過ぎ
 飛ぶ度に鱗へ皆の眼が動き

秋晴 岳柳 與詩夫 突支坊 多聞 茶齋郎 件内 無心 無限 羊司 柳秀 眠聲 鮎美 郊村 水郷 醉夢 大公坊 散柳 籬楓 柳陽
 陽のあたる鱗へ繩の輪を畫き
 魚屋は鱗生きる様に引き
 蛇使ひ蛇の鱗の觸れ心地
 松肌の鱗を蟻の見わかかく
 蠟涙ほたりと落ちて鱗めき
 露路口に鱗がさんだ晝さなり
 銀鱗虚空にひるがへり夢中なり
 横腹をきらり金魚向をかへ
 いゝ音を立てゝ鱗が取れて行き
 鱗でもあるかに毒婦云ひなされ
 庖丁へ鱗重なり合つてつき
 炊事場に鱗も飛んでよき日なり
 頭痛營めいて鱗の手に乾き
 シヤゝゝゝ鱗氣味よく落せ
 鱗剥く側で小供嬉しがり
 鱗なき剥ふ亭主現はれる
 魚屋が來た其のさぶ板の鱗
 船底の垢鱗の光りやう
 鯛網鱗で光る水になり
 鱗これたまゝ水族館に生き

光路 町二 同 進一郎 同 豆蔓 同 刀四郎 同 志郎 同 千鳥 同 翠峯 同 草明 同 萬よし 同

川柳家の戸籍調べ

□ 係 馬 行 生

(一) 姓名 (二) 雅號 (三) 別號 (四) 現住所
 (五) 生年月日 (六) 職業 (七) 好きな句 (八)
 好きなタイプ女 (九) 自信の句 (一〇) 川
 柳以外の趣味 (一一) 配遇者の有無 (一二) 嫌
 ひなもの (一三) 川柳に手を染めた年月

(一八) 三村叱咤郎

(一) 三村泰郎 (二) 叱咤郎 (三) なし (四) 岡
 山縣三石町 (五) 明治三十年一月二十九日
 生 (六) 會社員 (七) 所謂革新系のものに多
 いですけれど餘りにも數多くて書けば限
 りなくなりますが (八) 恐らく私の生涯を通
 じての難問題でせう。さう唸つても頭に
 浮いて來ません (九) 先年大正川柳で「春」
 の選後へ「石塔へ刻む一句を得ればよし」
 是を發表するに共に一切の選句を辭退し
 て其一句を得たい爲に焦燥に焦燥を重ね
 てるます。今の所これならさ云ふべき程
 の句のない事を憾みに思つてゐます (一
 〇) 草花を弄る位な事です (一一) 有りま
 す (一二) 酒、蛇等 (一三) 大正五年三月で
 す。

(七) 揚井 二南

(一)揚井(やぎる)勉(つこむ) (二)二南
 (三)花石(四)神戸市花隈町九六番屋敷
 (五)明治四十年四月廿二日生(六)大阪高
 商生徒(親の腰纏り)(七)根元紋太小父さ
 んの「雨降りの軒を煙は出難くがり」其
 他澤山あります(八)未だ研究中で確答は
 出来ません、うっかりした事を云ふまじ紋
 太小父さんに叱られますから(九)未成
 品ばかりで之云つて自信のある句はあ
 りません。近作「校風に反く姿で友に會
 ひ」位が自分で満足出来る句です(一〇)
 甚だ多趣味、荒い所では擊劍(二段)古種
 な所では尺八(都山流)謡曲(觀世流)淑や
 かな所では生花(未生流)茶道(裏千家)其
 他映畫、讀書等月並なるものもあり、右
 の内劍道、生花、茶道は隨時指南を致し
 ます(一一)今頃あつたら大變です、それ
 でも希望者があれば本人履歴書携帶面
 談の上採用せんとも限りません(一二)大
 いにあり、地震、雷、火事、親爺は申す
 に及ばず、その最も代表的なるものに所
 謂モダンガールなるものがある。モダン

魚河岸の畫を鱗に鯛がこび 美の作
 花片のたごへも鯛の鱗なり 同
 陽炎に地引鱗のまゝ干され 同
 (運後に)敢て加筆してみた句が澤山ある。
 作者の氣分を損なはぬ事には腐心したつも
 りである事を諒せられたい。中で自分なが
 ら會心の筆を加へ得たまと思ふものに左の句
 がある。

魚屋が來た其のまぶ板の鱗

原句は來たらしいであつた「らしい」以上
 に作者には魚屋の來た事が確かに感じられ
 てゐるに違ひない。で「らしい」はどうも生マ
 ぬるい、何さかしたい。「まぶ板の」を上へ置
 いてみたりしたがいけない。それでやつま
 「其の」の字を思ひ當つてホツとした氣分にな
 つた。作者にも恐らく満足していただける
 だらふと思ふ。作句に當つては如何に表現す
 るかが第一に解決されなければならぬ。作
 者はあく迄も言葉をさがさなければいけな
 いと思ふ。

鱗なご刺ふご亭主現はれる

原句座五は「やつてくる」である。「やつて來
 る」は何さなしに距離があり過ぎる。遠くか
 ら來るやぶに考へられてならない。私は即座
 に「現はれる」と直してみた。それで句がより
 一層ユーモラスになつたと思つて微笑した。
 此の句は大變私の心持ちを明るく和やかに

してくれた、美しい句である。日曜などの所
 在なさに珍らしく臺所へ現はれて「鱗でもひ
 かうかれ」に、別に自らすゝむでもなく、お座
 なりさ云ふでもなく、やつてくれる云へば勿
 論迷惑とも思はない。さりさて已がやるく
 さかきのけて出る程もしない位の氣分で現
 はれる場合である。私は此の座五も直し得た
 さ味増を上げる。

次に鱗を花びらに譬へた句は澤山あつた。中
 で、みの作君の鯛の句をまつた。修辭法に一
 日の長が流石にあると思つたのである。

それから、此の集を手にして一讀した時私は
 闇雲に腹立しくなつた。それは源坊氏の橋に
 ランチュー、金魚の一種と註があり、萬よし
 氏の中に、雜魚場は東京の魚河岸だと説明が
 附記されてあるのを見た時である。東魚如何
 に馳け出しの野郎でも、ランチューが金魚の
 一種であり、蘭蝶は新内にある位は知つてゐ
 る。雜魚場の何たる位も承知してゐる。べら
 ぼうめ、それ程女くされて還をする、さして
 いたゞく事が何處にあるものか、拒つちまへ
 て實は返送しやうと考へたのであるが、時恰
 も夜であるし書留は明日の事と疑たのです
 っかり冷僻になつた。選は主幹路郎氏から托
 されたのである。僅ゴゴテの爲に路郎氏の知
 遇に反くのも本意でない。殊に辭かに考へて
 みれば、自分だつて大威張で世の中の事細大
 洩さず知つてゐる譯では勿論ない。註を附せ

られた諸君が敢て選者に對してのみだとも考へられない。又選者讀者を侮辱したと思ふのも早合點である。要は自分の作がムザ／＼討死したくない事に外なるまいと思ふ。……さまア考へて自ら其の氣の早い、江戸ッ子のあわて方を苦笑したのであつた。兩君に對して勿論何の惡感情を持たない。只源坊氏の句には遺憾乍ら共鳴するものを見出さなかつた。心あつて没にしたのでは決してない。東

魚憚り乍らそんなケチな考は少しもない事を兩君に御了解を願ふ。然し投句者が選者を充分に信ずる事の出来ないやふな氣分が多

染直し

染直しして流行を諦める 謙二
 染直し風呂屋通ひにおちぶれる 突支坊
 四十今年傘を染直し 普天
 染直しそこよい加減なごこ出し 心耳
 染直し姉に劣らぬ器量にて 一紅
 なさぬ仲姉のは母の染直し 竹雪
 見本さは似ても似つかぬ染直し 松壽
 洋傘の最後は黒に染直し 富久雄
 染直し柄は女房にまかしきき 鎌月
 染直し少し氣の張る座敷なり 多聞
 妹に知らさずそつこ染直し 太公坊
 黒く染直したオーバ父が着る 町二

少でもあるとすれば、それは考へなければならぬ事と思ふ。當分、一年が一年半も川柳にたづさはつて何々の同人までもなれば、忽ち選者に名を列れる世の中である。選者の權威甚だ影が薄い、心細いものである。一チへろ／＼選者東魚の問題くはない。柳壇全體が眞面目に考へていゝ事だと思ふ。例によつて軸吟を追加して筆を擱く。

鱗をひく勝手へ 妾懷手
 鱗をひく鯛組を尾がたゞき

(東魚生)

石賀馬行選

染直しへ姉の好みの刺繡なり 件内
 亡き姉の形見冷たし染直す 無心
 人並に著せては居るが染直し 花蝶
 染直し匂ひが少し氣かゝり 雅路
 染直す分かご足で隔へ寄せ 松水
 染直し今年は是で行くせう 郊村
 染直しと着なさいご下女へ下け 志郎
 まに合ふて矢張り嬉しい染直し 夢人
 染直す手間だけかゝる形身分け 鮎美
 新調は子供へ廻し染直し 柳陽
 色上げの帽で親父にそつくりな 水郷
 染直ししてきる帽のいゝ氣持 督の字

ガールを見るさすぐ撲つてやりたくなる
 ミ云ふやうな危險思想さへ持つてゐる位
 です(一三)大正十三年の秋位からです、
 未だ日尚淺く極力研究中にあります。

(150) 戸倉 普天

(一) 戸倉誠司 (二) 普天 (三) 小山文三、田
 端安一 (四) 兵庫縣川邊郡川西町鶴之莊
 (五) 明治二十一年二月二十六日生 (六) 會
 社員(元は百姓の若旦那(七) 一人の子の
 たれ教へねぎ嘘をつき) 涼しい澄んだ目
 に長い黒いまつげ、中肉でやゝ淋しい感
 じのある夢二式の女(九) 「まだ知らぬ鐵
 路のやめを子の病むに一是も古い時代の
 句で近頃は一向自信の句がありません。
 (一〇) 隨筆めいたものを書く事、汽車辨
 當のレットル蒐集、映畫も見ますが勿左
 衛門の歌舞伎が好きです(一一) 有、女學
 生二人ミ中學生一人の父(一二) 人參、モ
 ダンガール(一三) 大正三年頃大阪毎日新
 聞の活字になつたのが初め。

(151) 澤井朱唇子

(一) 澤井久男 (二) 朱唇子 (三) 磯佐夫、ひ
 さし、春梅、麗水、祥久齋、涙紅、碧濤

引張るまできゝます。染屋云ひ
 染直し値切つただけに染つて來
 染直しももう是きりの黒い色
 染直し染賃だけのものになり
 日曜日夫婦して蚊帳染直し
 大柄を母染直ししゝゝ
 母まめに染直してはさらにする
 染直しやつぱり古は古であり
 染直しするならわしが世話をする
 染直しいつそ妹にやるさきめ
 色あけをしてから二年又冠り
 染直し一層のこま無地にする
 十年は是で結構だ。染屋
 染直し今流行の柄にする
 染直しすりや着るゝ叔母は呉れ
 染直し京都の姉の世話になり
 染直し十年前の柄を云ひ
 染直し近の地色も聞いてゐる
 子澤山染直しして一つ出來
 染直し元のこころへ皺が寄り
 染直し妻けちをつけてゝゝ
 染直しさうゝ母のものに成り
 染直ししみのあつたも取れてゝ
 染直しです。女房眞面目なり
 染直し亭主疑ひ一寸かけ

溪象 柳 無 毒 口 大 句 源 聞 籬 柳 楓 草 石 彩 北 力 一 眠 萬 光 同 山 同 同 翠 同 同 同

住 吟
 染直し柄はお好み次第なり
 染直し女房決斷刀に富み
 染直しやつぱり元の柄をほめ
 染直し貯めるお方は違ひます
 染直し氣に入つたよな入らぬま
 悉皆屋只へいゝゝ染直し
 染直し艶の消れたを如何せん
 期待した程よくなぬ染直し
 稽古する絞り何かさ染めて見る
 染直ししてから人にやる氣なり
 丸染のオーバの裏に氣が引ける
 染直し着られぬやうにしてしひ
 染替にも荷物の數に入れて嫁き
 ふだん着に決めて縫ふ。染直し
 染直し暗着にならず下に 着る
 染直し紺の匂ひが鼻につき
 染直し見せつけられて氣が動き
 染直し素直に羽織の父さなり

五 客
 仕立屋で譯を云つてる 染直し
 (評) 中七譯を云つてるは少し活躍が足
 りない。仕立屋に賞められたさかその他も
 つさ内容の働く表現を試みられたならば
 今一層秀吟たる事を得たであらふと思ふ。
 染直しいくらも着ずに裾が切れ 一 休

翠峰 茶哲郎 悟郎 萬よし 太公坊 松雨 散柳 千鳥 柳秀 醉夢 滄海 太路 笑郎 北山人 京郎 山雨樓 光路 大夢子

樓主人(四)大阪市北區空町一丁目四二
 番地(五)明治三十年三月二十一日生(六)
 無職(七)先輩諸氏の句に好きなのがあり
 ますが書切れません近頃では路郎先生の
 「草莽の臣悲しみの炭をつぐ」を敬虔な心
 持で拜見致しました(八)中肉中背(ぎち
 らか云)へば胴より足の方長く)睫毛の
 長い、文字通りの明眸皓齒(九)思つて居
 りましても恥しく感じます(一〇)講、俳
 句、詩歌、園藝、釣魚、花道、茶道、將
 棋、園碁、音樂、讀書(一一)無妻(一二)
 多人數中の金談、七三の三つ髭(一三)川
 柳らしくなつたのは大正十三年頃でせう
 か、本誌へは二柳子氏の御紹介を得て投
 句するやうになりましたまだ馳出してす
 (一四)久方 清宵

(一)久方清之助(二)清宵(三)紅路(四)島
 根縣松江市雜賀本町(五)明治四十五年三
 月二十四日生(六)給仕(七)「理解した友
 が得られぬ淋しい身」(八)「只々戀人一人
 他にすぎな女はありません(九)「兎追ひ
 雪白妙に眼を廻し」(一〇)「唯戀人さ一日
 樂しく暮すこゝ(一一)「ありません(一二)
 戀敵、じやけんな父親(十三)大正十五年
 十月頃からです。

(評)よく穿つてゐる。素直な句なり。

俺が着て染直しとは見ぬまいが 興詩夫
染直し別な用途を考へる 岳柳

高座から吹聴しておく 染直し 進一郎

(人)講習會からは矢鱈に染直し 羊司

(評)面白し、矢鱈の二字稍俗に過ぐる感ありども。

(人)染直し色賞め合き値を尋ね 秋晴
(人)染直し下着にしても引立た 錦魚

公 用

◇ 柳 陽 選

訓示した後で個人として話し 誠 司

約束を公用わけもなくこはし 錦 魚

公用で来て親戚に宿をこり 突 支 坊

公用の名刺に肩書ならべ立て 町 二

視察談報告すんでから云ひ 水 柳

公用へ不審を抱く日が續き 岳 柳

公用證點呼の喇叭町で聞き 無 限

公用の裏に私用をソツト拘き ト 柳

酔居たではすまされぬ社用を 刀 四 郎

公用は書類ばかりの折靴 醉 夢

公用を楯に言譯負けて居ず 千 鳥

役目柄奥の座敷へ通される 翠 峯

公用の旅へカメラを忍ばせる 句 君

公用で来たミ庭から歸るなり 源 坊

(地)染直し昔は質に入れたもの 山雨樓

(評)平凡の如くして嚙めば味はひの出る句なり。且一脈ひそめるユーモアを愛す。

(地)染直し一度は里へ着て歸り 光 路

(評)賑より里の母眼の前に見ゆるが如し「里の母感心して居るばかりなり」が。

(天)染直し由緒正しき紋所 大夢子

(評)句品を尊ぶ、紋を詠める句多き中に嶄然他を壓す。

中 野 柳 陽 共 選

公用は宿でヒツソリ一人酔ひ 鮎 美

公用を刑事私用の様に見せ 謙 二

公用は旅の氣持になり切れず 眠 聲

大役をはたし港へ近うなり 郊 村

(佳)公用がすめば、だけた話 無 心

公用のバスが目立つ日曜日 柳 秀

歸途に巡査電車に小さく乗り 同

公用ならば役所でさかろく逃げ 羊 司

臨檢は見知りの顔に苦笑ひ 源 坊

公用はすんだが電話未だ切らず 豆 蔓

行列の道を横切る郵便夫 草 明

(三)制服の巡査へ無駄も話されず 草 明

ホーネームーン何時か社用で来た所 豆 蔓

社用フト下車して見む驛を過ぎ 同

公用のもてなしをフト淋しがり 多 聞

川柳書架 (廿四)

誹風柳樽通釋 (三)

武笠 山 椒 著

▲本書の序文「此の本を讀んで下さる方々へ」を抜く。

一、此の誹風柳樽一篇の通釋は、相變らず素人の素人解ですが、今度は幸に、岡田三面子、今井卯木、西原柳雨、山中共古、安藤幻怪坊の五大家の校閱を経て諸家の懇な御示教を得ましたので初篇、二篇に比して、大分しつかりしたものに成つて居る事を信じます。

併ながら尙切に、讀んで下さる方々の御啓發を御願ひ申上けます。

二、五家の御意見は、すべて原文通りに載せて置きました。但し山中翁のだけは翁の御口述を著者が聞書した所もあります。

三、句の順序が岡田三面子博士の御研究の結果による事は、二篇の通りであります。

公用は笑つたところですんで居る 翠峯
 (人)代表者だけ東京で年をこり 花蝶

(評)着想の妙は句を大なるものさなし、現代相を深刻に表現し得て大成功と云ふべく「東京」と云ひ切つた所に作者の自信がうかゞはれて氣強い限りである。

(地)公用へ只美しい灯がならび 一休
 (評)難題を無造作に吟つた手腕に敬意を表します。只の字に千金の重みあり。

(天)座蒲團を出て税務吏^{より}掛り 源坊
 (評)弱者強者皆結構は人間苦の中にあへいで居るのだ。役人根性も又悲愴にして滑稽味がある作者の一步も用捨しない所へ共鳴する。人間味を没却する輩よこの句を見ての感じや如何。

追記原句「座蒲團をよけて税務吏脇へ掛り」をよけて脇の重腹をさけたる座蒲團は税務吏の來てから出したるものとて勝手に訂正したる非稿をお詫びする。

◇ 萬よし 選

(佳)公用の少し落着く町につき 鎌月
 公用は別入さいふ言葉つき 富久雄
 公用の一汽車だけを奈良へ降り 北山人
 公用の騎兵の肩に銃おさり 突支坊
 公用の客を待つてる湯がたぎり 岳柳
 公用ののつびきならぬ友に逢ひ 石竹
 公用の刑事私用のやうに來る 若人
 公用を濟ませてからは暮も圍み 與詩夫
 官邸を出るミレンズに攻めらる 笑郎

(佳)公用と別に檢事の隠し 藍大夢子
 公用のふさ立止る寄席の門 北星
 公用の旅へカメラを忍ばせる 句若
 公用で同年兵を養ませ 將兵
 悠然と行列切る郵便夫 草明
 公用を迎ゆる方もしやちこぼり 刀四郎

(佳)公用は明日の豫定を切上り 松雨
 公用をかけて別府の友を訪ひ 鮎美
 (佳)公用は旅さいふ氣にまだ 眠聲
 公用は馬車でゆられて村へ着き 彩秋
 公用の見送り給仕一人來る 夢人

(佳)公用は名所に近い驛を過ぎ 千鳥
 公用の宴會にチトくだけ過ぎ 柳
 (佳)公用證町の喧嘩を見て歸り 無眼
 公用は名所ハガキも買ふて來る 溪象
 公用に新任眞面目過ぎるなり 松水
 公用へ公用だけの馳走なり 雅路

(佳)代表者だけ東京で歳を取り 花蝶
 新婚へ出張の日が迫つて來る 大公坊
 公用で行つたは市制布けぬ頃 離風
 公用を認めて呉れぬ妻さなり 茶無眼
 郷友會公用で來たのも交り 普天
 (佳)訓示した跡は個人として話 普天
 公用の車中へ記者は突貫し 錦魚
 公用のさきは違ふ巡査なり 同晴
 公用に切手を貼らぬ手紙が來る 同晴
 (佳)座蒲團を税務吏腰をかけ 同坊
 公用で來たさ庭から歸るなり 同坊

ます。

四、句の文字遣ひは、變體假名を普通の假名に直した外、すべて原本の通りであります。

五、装釘の意匠と見かへし講は、鱧崎英朋畫伯の御苦心の結果です。

六、校訂については岡田養齋氏を煩はしました。

七、初篇、二篇については、諸家から提示された御意見を参考して大に改訂を加へる積で、只管其の時機の來るのを待つて居ります。

八、本書は編述刊行について御援助下された諸家對してあつく御禮申上げます。昭和二年五月 山椒生

▲昭和二年五月二十日發行。四六版四四二頁。正價金參圓。發行所は東京市神田區錦町一丁目十九番地有朋堂書店。

▲第三篇から五氏の補説が加はつた。著作の眞面目な態度がうかがはれて嬉れしい。通釋が何篇まで續くかは知らないが著者山椒氏の努力と書店の好意を多ししなければならぬ。

留守へ来て公用でんごばかき
 (佳)公用はこれで仕舞ひと笑ふ
 公用で来しも矢つ張り母に逢ひ
 公用の眠に麗から人出なり
 警察の聲へ素直に立上り
 (佳)公用の小使部屋で馬が合ひ
 公用の旅にもいきな女連れ
 (佳)公用の旅費切りつめた額
 公用で来れば宴會待つて居り
 出張の夜に氣のない寄席を聞く
 公用が父の不在へ一寸寄り
 (佳)ホネ々何時か社用で来た處
 公用へ暇な電話もかゝつて来

翠峰 同 柳 同 郊村 同 柳秀 同 羊司 同 豆蔓 同 無心

佳新婚へ退廳の時計の陟らず
 公用の譯を名刺の裏に書き
 公用の刑事芝居も見て歸り
 ニコリとせずに訓示の美辭麗句
 (佳)杭口を恐々視察員覗き
 公用の墓參もかねて落着かず
 車中談なごも公用考へる
 (佳)公用の田植の畔へやて来る
 公用の始めてさいふ地圖を持ち
 公用へ只美しい灯が並び
 (佳)公用のはからず逢ふ國の人
 (軸)司令官笑顔と威嚴併用し

無心 同 水郷 同 町二 同 多聞 同 一休 同 一休 同 萬よし

合本と殘本

「川柳雜誌」の殘本が少々ありますから、不揃ひのため合本が出来ず
 に困まつてゐられる方は至急に申込んで下さい。

第一卷の殘本 一部 各拾錢 第二卷の殘本 一部 各拾錢

第三卷の殘本 一部 各拾五錢

極小敷かないのがありますから至急申込んで下さい。

第一卷 (合本) 金五圓

第二卷 (合本) 金三圓

第三卷 (合本) 金三圓

作句十戎

萬よし

狭い範圍を深く見よ
 聞くよりは行つて見よ
 麗を消してわめけ
 よく作つてよく捨てよ
 行きつまつたら出て遊べ
 スイコウセれば書くな
 人の句のやうに自分の句を檢せよ
 一番よい言葉は一と通りよりない
 選者のための句ではない
 時々習慣の衣を脱げ

轉居其他

▼同人酒井駒人氏 神奈川縣中郡平塚町新
 宿旭座通五〇五▼木葉散子氏 高松市宮脇
 町上野留五郎方▼井上史郎氏 大阪北區
 北同心町一丁目一八▼都藤冷笑氏 大阪
 此花區上福島北三丁目二▼酒井鎌月氏
 福島縣耶麻郡吾妻村沼尻元山▼伊豫田登
 喜治氏 東京府大井町篠谷六一三三▼同
 人安井ひろし氏 大阪南區安堂寺橋通一丁
 目四三▼淺井五葉氏 市區整理のため大
 阪港區市岡元町二丁目三七と町名を改稱
 ▼川村花菱氏 電話開通四谷一九九七



筆隨私の先祖

天神木像三鎧櫃紋所
安川 久流 美

私は加賀國河北の高松といふ一漁村に
呱呱の聲をあけたけれ共父の先祖は石川
郡安原村打木の土ン百姓であり、母の先
祖は矢張り石川郡で宮の腰に近い寺中で
あるから系統的からいへば純石川ツ兒で
ある。
父の父即ち私の祖父は平右衛門と稱し
て、忠臣蔵のお輕の兄さんと同名異人で
ある、その長男が平六といふ金澤訛の名
で、次男坊の與三松といふのが私の父に
なる譯だ。然しさういふものか祖父は長

男の平六（私の叔父）に意見が合はず次男
である私の父に家督を譲つたものである
私の祖父平右衛門もその元をたゞせば
總領ではなく次男坊で、その兄が安原九
兵衛（今は亡き人）といふのでその子孫
は今も打木の村に代々の百姓をつづけ
る。

さて茲に可笑しいのは、兄の九兵衛と
弟である私の祖父が、安原と安川と姓
の違つてゐるこゝだ、之は百姓であるか
ら安原といふ語呂、ワラの安いのは縁起
がわるいといふ頗だ洒落氣分から、安川
と改姓して分家したものと云ふ。

だから元を洗へば安原村の安原といふの
が眞實なのであることは亡くなつた父か
ら聞いた話である。與三松といふ百姓臭
い名を買つた私の父は百姓を嫌つて刀圭
界の人と成つてから「茂一」と改名してゐ
る、何でもその頃には、改姓や改名は役
場の手つぎも極手輕に出来たものらし
い。戸籍簿を繰つて見るに平右衛門の妻
即ち私の祖母に當る人の名が「びん」と

いふ滑稽な名である。矢張り打木の村の木
村ながしの妹である、それにしても
變つた名をつけたものである。びんは瓶
である、それかあらぬかその腹から生れ
た私の父も、又私も瓶とはなれぬ酒
の嗜好も傳統的であるのは妙である。祖
母のびんも女ながらも少し左りがいける
口だつたので中風で此世を去つてゐる、
それに父の腦溢血の死——何だかこの頃
では私も酒で病氣が出るのかも知れぬこ
自覺してゐる。

現在私の家の宗教は禪宗であるが、先
祖の平右衛門は一向宗だつたさうである
それが一村悉く一向寺に反對して禪宗
に宗旨がへしたこのことである、その原
因の詳細は知らないが、今も私の先祖の
村に禪宗の家のあるはそれ以來であらう
さいふ、村には禪宗の寺なく先祖の眠つ
てゐる墓は金澤市笹下町の曹洞宗龍雲寺
内にある。

古川柳にいへる如く賣家と唐檮で書く
三代目の文句に洩れず安原家から分家し

て三代目である私は親譲りの財産はこごごく無くしてしまつた。これいふ目星い道具も残らず賣りつくしたが、現在私の手許に平右衛門時代からの品が僅かに二點だけ残つてゐる。それは菊輪に梅鉢の紋所がある鎧櫃、寄木で大野辨吉細工といふ天神像である、不思議にこの二點だけ床の置物になつたり、一は米櫃なつたりして百年近くもあるわけである。天神の木像は無論きつ物であるが辨吉細工であるは事實である。信じてゐる、又之は母方の先祖から傳はつたものとも思はれる、それは母の先祖の出生地が寺中であつて、辨吉の出生地である大野町に近しいふ事、母の父吉右衛門は僧物職であり、この辨吉は職業柄接近の機があつたものとも察せられるからである。鎧櫃は、祖父の平右衛門の父が、その昔百姓でなく御徒歩だつたとも傳へられてゐるから、何れは金城武家の拂ひさけであるかも知れない、私はいつか「鎧櫃米櫃になる紋所」を川柳化して微笑した

事がある。

古川柳にはよくこの紋所を諷した句を見うけるが、私の先祖傳來紋所は月並の「蕙」である。最も平民的の紋である。質の値高く、借著にやすい民衆的の紋である。その蕙の紋の家に菊輪に梅鉢の紋の鎧櫃があることは頗る勿體なき感じがしてならない。木像の天神と共に此二點だけは大切に保存し廿五日には梅干をたべぬといふ天神の命日を尊敬しつゝある。先祖の話が遂に敬神の道へそれたが、私は海に縁ある百萬石の城下に住んで、此二點だけ私の手から自然はなれて行かぬ所に不思議な因縁がつながつてゐるやうに思へてならぬ。(五月廿七日)
(附記)川柳雑談社の同人中に、三川の郡安原村の人が、偶然にも二柳子、石笑の兩君がある。先祖が同様なじ水をなめ、同様なじ土を踏んだなつかしさもあつて、斯んなつたらぬ稿ならぬ。

耳と眼

富士野鞍馬

▼勝訴こそしたがもさく借つた家
これは川柳雑誌六月號近作柳傳の中にあ

つた句、これを活字で見た時は別に何もないが、耳からうけ入れた場合に一寸句意が變つて聞ゆる。

セウソコソシタガモトモカツタイヘ
吾々京阪人には何ともないが、東京の人は「借つた」は云はない「借りた」いふ、「カツタ」さきけば「買つた」さ解する。

斯ういふ例は澤山ある、京阪語調が東京人にわかりにくいのは無理はない、且外溪花坊氏が上京されてきやりの會で、披露された時、みんなが薩張りわからないといつてゐたやうである。

見て感興の深い句が聞いてソウ感じないといふやうな句は缺點があるといひたい、なるべく耳からも眼からもよく感じる句がほしい。

▲湯加減について淨るりさなりにけり
これも東京人にはハツキリ淨るりが隣間に、義太夫ミスルドク感じない。

滯京中の蛭子氏が京阪で互選の頂戴の制度は句を感受探選する暇を與へないから

困る、みんなはアレでわかつて居るのか知らさか云つて居られたが、京阪の人はこれ結構わかるんですお答へして置いた。則ち耳から感受して即決する事に刷れてゐる所謂商人式の京阪人はそれで探選する能力があるを信じる、併し此場合語調の違ふ關東人が京阪語調の披講をきいて即選する事は不可能である、蛭子氏は東京育ちであるから頂戴制の耳から京阪語調で句を感受した場合、句を咀嚼する以外に頭をつかふ事さなる、随つて即決にいくいかも知れんのである。

私の子供を小學校へ入れるべく入學の前日京都へ連れ歸つて翌日から小學校へ通はしたか、先生の云ふこゝがわかりにくく小さな頭を二重につかつて、こまつてゐる事をたしかに實驗して居る、京阪語調は東京關東人に眞似出来ないそれだけわかりにくいのである。

ズツと前京都の句會での披講に『蒸す飯の湯氣にお晝が近くなり』とかいふ句が上五が『娘師』とさかしたたので一座の

みんなからやかましく云はれて何回も讀みなをされたがうまく『蒸す飯』と聞けなかつた、披講した人は純京都人でなかつたかも知れん。

讀んだ場合語調のちがふのは致し方がないが、句意の變つて聞ゆるものやハツキリしない句は名句でも狭いものになつてしまふから東西共通のキツバリした句を作るやうにしたい。

哀傷篇

高木夢二郎

うれしさは遺言もなく父逝ける。
二月十四日に父が死にました。貧しいながら三人の子を養ひ堅い村の人々に守られて明けに間のない午前二時に、何の苦痛もなく靜かに逝きました。

佛壇の父に親しう子等集ひ
善人でありしをせめて慰さむる
父は靜に逝つた、父の一生は物質的には恵まれなかつた。しかし精神的に何の不平等も不満もなかつたらしい。酒が好きで

あつた。煙草もよく吹いてゐた。しかし人争ふた事もなく人を嘲笑つた事もなかつた。今私達三人には借金も残して行かなくなつた、が、財産まで何一つ残して行つてくれなかつた。

貧しさの棺が吹雪の中を行く
降り止ぬ雪に父親逝きにけり
葬儀は十六日であつた。

前日までからつと暗れてゐた空がさうした事が出棺の十一時頃からチラチラ雪になつた。私たちの爲めに空も泣いてくれるのかこんな月並的な事さへ感傷的な心を慰められるのであつた。

ぎの誰の言葉も涙止め兼ねし
誠私の怒ははこの一句である。多く人が悔みを言つてくれる。そのどれも、私のこの傷心には空虚に感じられる會て私の長女が死んだ時、
本當に泣いたは親の二人きり
さものした。それにも増した、この淋みしさ便りなさは、その誰の慰めの言葉も慰めの言葉として以外にひびかなかつた

今日からはこの氣輕るさも打ち沈む

一九二七、父の四十九日の夕

鎌倉江の島見物

省・ます 女

いつでも行けると思つてゐるうちに機會を失ひ、東京を立つ前の日に、疲勞していやだ云ふ竹馬を促して鎌倉行、停車場前を左折すれば鳥居が見ゆる、

老松の並木、英雄偉業の跡を偲び大小名の生活振りなご腦裡に描く。八幡宮は石清水を勸請せしもの、大震災の爲め社殿は修築中にて圍はれてゐた、赤橋も破壊され朱塗の拜殿靜が法樂の舞も夢。

一世一代鎌倉で舞ふつらさ
大名を下方にして靜まひ

大公孫樹のみ天を摩してゐる、
修善寺の煮湯公曉の業が沸き

頼朝放鶴の事あり、
一時に放せし千葉へ御意

舞上る鶴に烏帽子をつい落し

狂句「若宮の社前に茂る老銀杏」の若宮丈は無事に變つてゐるに、柳の池は濁つて居る、彼の西行銀猫のエピソードが畔を徘徊せしめる。

千本も煙管が出来る猫をくれ
その猫をくれさつせへまこ村子供

大倉山腹に頼朝の墓、大江廣元島津忠久の墓あり、忠久が建替つた云ふ頼朝の墓は、五尺ばかりの苦蒸した五輪塔、鎌倉幕府を開いた人にも思へぬ釋實素である三代にして三ツ鱷の代こなる。
あつけない右大臣だま政子泣き

竹馬は磁石を探せしが見出さず、鎌倉宮に大塔宮の土窟を拜み、明治時代の遺物の馬車で鎌倉五山の第一なる建長寺にむかつた、従容録提唱の看板、總て宋を模した云ふ、山門は殊によい。
落葉時さてせはしない建長寺
竹箒やたら買込む建長寺

今はそんなに掃除も行届いてゐない、圓覺寺は全滅、再建寄附募集、青真眞の設計圖揭示があつた。

光明寺夫婦火急に思ひたち
極樂寺近所に彌陀の光明寺

子なき者に灸を施すころ、縁切寺東慶寺の堂は、巨漢宗演が生前住んで居た云ふが、今は三溪園に移されて居る、尼寺臭き庭構へを塙の穴から覗き、それよ

り自動車電車にて長谷大佛を觀音に行

長谷寺の面蠟燭は引道具
京都より見れば鎌倉赤子なり
なご言へご確かに日本一の美男におはす桂月に大佛論あり、大に此の御佛の爲め氣を吐く、二錢で胎内拜觀、災後の修理了りて四隣心地よし。權五郎神社には人影もなく袂石手玉石なご氣がつかず、星月夜の井戸は訪ふをやめた。

鎌倉は下から星の出るころ
「柳には衣松には袈裟をかけ」、「浪錢をくぐつてゐるは島子供」、「弟も矢筈の毒に中てられる」なごの古跡は素通り、繪の様な江の島の長い棧橋を渡れば左右に並ぶ貝細工の土産物店より頻りに呼ぶ、舊岩本院今の岩本樓は白菊對白休が兒ヶ淵の傳説で名高いけれど、今更興もひかず、

案内者ちごが淵にて落をこり
片言に古歌のいはれも兒ヶ淵
案内は三十錢、江の島は殿島竹生島三俱に、日本三辨天の一であつて、神社は邊

津の宮、中津の宮、奥津の宮の三つにわかれてゐる、

江の島は三冊もの宮造り名物螺の壺焼を賞味しつゝ、天空に富士の英姿を望び、格別の見晴らしである。

五錢別に蠟燭代の志、で岩窟に入る、辨天窟さ云ふ、中は胎藏界金剛界三三筋にわかれ暗さは深く薄氣味悪い。

念力で岩屋へ通る派手な旅藤澤より歸途についたが、昔は遊山さして江の島詣では可なり喜ばれたらしく、

江の島はゆふべ話して今日の旅江の島を見てきた娘自慢をなし

江の島は名残を惜しむ旅でなしなごある、向盲人の江の島行もある、

手遊の鬘斗に鮑の島みやけ遊行寺に行く氣力もなく、新橋驛下車兎も角橋善に飛込むで腹を作る、竹馬は分量多き井を眺めて箸をつけず馬方天婦羅かなご古句語の情まれ口をきく。(五月二十日竹馬を残して歸途につく朝諺す)

下らぬこそ讚美

庄 萬 よ し

金岡に招かれた飛驒の匠がスーミ通るミ

金岡は死人の傍に居眠つてゐた、死臭紛々坐に耐へず逃げ出した。後で聞く馬鹿々々しい金岡が死人の畫を書いたのだつた。匠も去るもの、方丈の室を立て、巨勢金岡を招いた。金岡が這入らうとする戸は、四方も自然に閉ぢて這入れなかつた。名人共は下らぬこごに一生懸命になるものだ。

眞田幸村が大坂城中で人が寝てから空の星ばかり見てる、思へらく「天文の用、異なり、豊家の末期も近からう」ミ城中の將士には眞田は下らぬこごを考へてゐるんだ。

甕瓶の湯のたぎり、蓋を上下するこご頻りなり、ワットは川柳を考へてゐる人でない、蒸氣力を考へこんだ、妻君の眼からは那君ワットは下らぬこごを考へてゐるですね。

默然ミ介山霧を吸ひ霧を吐き、中里介山は頼に霧の味を研究してゐる、凡備作家の眼に介山は下らぬ事を考へる男だ。

鯛の頭を拜んだり、壽計のレッテルを集めたり、電車の道を跣足でマラソンの襷古をしたり、ほごきぎすくミ夜通し首をひねつたり、帝國議場を講堂館之間違へたり、十羽で雀程の肉もないセキセいに千圓も出したり、局外者から見るこご皆下らぬこごであら。

下らぬこご思ふ局外者は熱がないのである熱した若人に愛人の一笑は天使の私語である、印度の富にも換へ難いものである局外者の眼に素敵ださ見ゆるこごは、破綻銀行の建築のやうに存外空つ様の仕事が多い。下らなく見ゆる仕事に献身的な熱を持つて居る人が、本當の人間味と確實性を持つてゐる。

大阪に居た頃

酒 井 駒 人

私は今平塚町の母の家に居ります。毎日ふらくして居るので退屈のあまり、行李から川柳誌を取り出し、創刊號から今までの雑誌に目を通した時、其發展したのに驚きました。と同時に又在阪中の當時が思ひ出されたのです。私のはじめて川

出席した時、幹事の助六氏が「駒人君御苦勞さん」を聲をかけた時、すみの方で準備をして居られた路郎先生が自分に向ひ君はわらい熱心やな」と云われたお言葉は今だに忘れません。

大大阪川柳社創立句會で、川上日車氏が「娘」の選をした時、水府、浪花坊兩氏の二句だけ抜いて、あこは全部没さなし軸吟を三句發表して出席者一同を喫驚させたのも忘れる事ができません。大阪日日柳壇へ投句して居た時助六、嶺月、飯山、彩霞、順三、眠聲、凡平、百石、廣賀の諸氏は紙上での馴染でした。最近の日日柳壇の顔觸れが知りたいものです。創刊號當時の同人であつた、夜調、光太樓、耕鹽、風人、露太樓、佳扇、剛山、飛水の諸氏は誌上でお名前さへ見かけませんが、いかがなされたのですか。あまり退屈なので、ペンの動くにまかせてこんなつまらない事を書いてしまいました。なんだかも一度大阪へ行つて懐かしい皆さんにお目にかゝりいろいろお

話をして其當時の氣分を味ひたいやうな氣になつてしまひました。(二、五、三)

下らない話を 川柳にする話

三好 革 郎

◇僕は此間東京へ行つて或會社の内容を調査したさうして調査したかさ言へば社員の中の不平等からいろいろな缺陷を聞いた、所謂正義派と稱する重役にまつては獅子心中の虫を利用した譯である。それを重役の所へ正面から持つて行つてさうですと聞いて見た、重役は困つた顔をしたが、その通りですと言つた。僕はさうですとさ言つて歸つて來た。友達にその話をするに何で貴様はユスらないんだ馬鹿だアと言はれた、さうしたらユスれるのか知らない者に取つては折角の良い材料も何にもならぬのである。その代り良い記事が出來た。僕は或る大會社の重役が互に排斥しあつて新聞政策を使つて泥仕合をして居るのを見兼ねて裏面で二

三日策動したら、表面だけは平靜に納まつた、後は時間が解決してくれるものと思つて、知らぬ顔をして手を引いた。友達はやつて來ていくら報酬を貰つたさうから電車賃も自動車賃だけ損をしたさう言つたら馬鹿な奴だなアと言ふ、人間は働いたら必ず報酬が貰へるものだらうか◇僕は此間友人の未亡人の子供が家出したので午前四時から引つ這り出されて探偵社を呼んだり新聞廣告の準備なごをして午前十時頃まで働いた、その時に僕等は慰めるつもりで死んでは居ないからさう云つて居るのに母親だけはさうしても死んで居る、早く屍體を捜して下さい云ふ。結局投身自殺をして居た事が分つた虫が知らずさ云ふ事が眞實にあるものださういふ事を知つた。そしてその子の七才の時にこの運命を豫言した易者があつたさうである。何も死なねけならぬ原因が無いのに自殺したのである。經驗と言はふか直観と言はふか、我々に分らない世界がまだ澤山ある事を知つた。僕は此の

子供が中等學校に入學する時に試験準備をしてやつた事もある。死ぬ二日前には僕の家へ来て一緒に晩飯を食べて歸つた。僕はそんなに呼びに来られても葬式には行かなかつた。無論屍體も見なかつた。僕にはその勇氣がない、薄情だと言はれても仕方がない。義理を缺いても止むを得ない、その子供の葬式は僕が行かなくても立派に出来た。僕は一緒に泣いてあけるさいふやうな藝當は出来ない。

◇川柳さいふものは僕のやうな散文的な頭の所有者には出来ないものさ諦めて居る。然し僕が人間的に餘り敬意を拂つて居ない連中が二三年川柳をやつて居るさ思つたら直きに卒業して僕にいろんな話をしてくれる。僕は十年以上も同じ仕事をやつて居て、まだ麓にも達するこゝが出来ないのに、二三年で或程度まで進めるさ川柳さいふものは結構なものだと思つた。そんな樂なものなら何時でも稽古出来るさ思つて今はバンの方へ頭を向けて居る。然し眞個の川柳さいふものは

そんな樂なものぢやあるまいと思つて居る。◇僕は飯を喰ふ事が川柳であり、煙草を喫み欠伸をするこゝも川柳だと思つて居る。僕が新聞記者時代に新聞眼を働かし、雜誌經營者として雜誌眼を働かして居るやうに川柳眼を働かせばこうして僕が原稿を書いて居るこゝも一つの川柳になるだらう。僕は川柳を山や川へ捜しに行く人が多くて自己の裡に捜す人が少いから本當に卒業出来るのではなからうかと思ふ。

◇下らん話には僕が尻を一つひつたら女將が飯を吹き出して、四邊一面米の花を咲かせたさいふやうな話もある。「尻をひつてをかしくもない一人者」さいふ古川柳の向ふをはつて「尻一つ御飯の花の咲き匂ひ」さやるかなこれぢや狂言だ、第一の下らない話を川柳にして「不平組會社の恥を觸れ歩き」は一ヶ月並ですな「正義派は外科手術だ」騒ぎ立て「重役は其通りです」肚をきめ」こしたら少し

は川柳になりますかね、第二は「人力を盡し時間を待つて居る」ぢや固過ぎる。「儲からぬ事にハネをあげ歩き」では感じが出す「喜ばれたッそれだけで満足し」でも駄目、こうなるさ技巧だ、第三は「母親はたゞうろ／＼泣くばかり」「家出した子はもう死んだこゝにきめ」「葬式に行かず一人で呑んでる」「泣くこゝの出来ぬ自分を淋しがり」これもまづい然し僕のやうな初心者はこれ以上作れない、所謂自稱大家連中はもつこい、句をこんな下らない話からでも作られるだらうと思ふさ羨ましい。僕も二三年川柳に頭を突ツ込もうかな。

額椽ト畫ノ

御用高須賀商店ヲ
御利用下サイ
大阪市此花區四貫島宮居町一〇
(但シ住吉神社西隣)



各地柳壇

川柳 六月例会

十八日夜

端の坊

六月の例会は水府氏が久しぶりに顔を出されたので川柳行脚の蛭子省二氏がその歸鮮の途中を句會へ驅けつけられたので、一層賑やかであつた。いつも顔を見せられる紋太氏等の見ゆなかつたのは當夜神戶にも句會があつたからである。

路郎、水府、省二、炭車、源坊、醉夢、溪水、幸泉、憲翠、九柳、白帆、一醉、秋晴、突支坊、閑路、彩峰、吞陽、かほろ、鮎美、眠聲、壽仙、翠峰、赤城舟々、英豆、飯山、助六、柳骨、ひろし、三笑、松壽、二柳子、ま私(萬よし記)

廊下(兼題)

路郎選

小使に廊下で逢へば道なよけ 飯山
新しうけ足袋でうれしい知恩院 水府
長廊下掛行燈が消ぬかかき かほろ
遅刻した廊下で校長さんに逢ひ 荻豆
浮れ客廳下で逢ふと秀けてゐる 毒仙

ひんやりと廊下づつたひも夏らしいスケートの廊下でさせると、暮し算術の時間廊下に立たされるすべりそうな氣持ちで導びかれ教室の廊下を母は行き過ぎるしはぶきもせず屈従す長廊下隠し藝廊下で何か音を立てすがたみへまともに歩く廊下なり廊下から教師いつもの顔になり廊下まで引張り出して嫌がられ廊下逃げて歸ろかなと思ひ大命を佩して戻る長廊下廻廊に一まご新の木がはまり雨の日の廊下へ遅刻ならばされ(佳)學校の廊下競馬の様に拭きお家はんの氣性廊下のつやで知り小料理屋所作臺ほどの廊下なり年頃の廊下へ出て眼を配り宿の風呂ハッ橋ほどに曲つて來(軸)廊下まで出るさびさりの聲は

結 松 赤 醉 秋 一 同 同 源 同 舟 同 溪 夢 か 英 路
美 壽 城 夢 支 柳 醉 柳 坊 々 水 中 ほ 豆 府 郎

實 費 省 二 選
よくくく見えて實費で賣たがり 路郎
實費だけ申し受ると香具師は云ひ 三笑
實費だけ取つたに三面記事となり 萬よし
九十錢いかにも實費らしく見ゆ 水府
實費さいふ靴の底みつめられ 彩峰
送料は實費の外に拂され 醉夢
實費だけ取つて饒實は開けてゆき 秋晴
實費ならわしも買つて一人來る 幸泉
實費から去年の柄がみんな賣れ 翠峯
京染屋實費の色へ洒落を言ひ 松壽
實費でも服を着られる身分なり 一
實費より女房の手間が高かつき 同
此の分に實費掛賣おこわられ 同
友達が器用實費の箱が出来 眠聲
洋服の實費でズボンが細すぎる 同
實費請求お茶の替りもつけてあり ひろし
住 句
洋服屋實費仕立に客をつり 醉夢
宴會の追加實費へ幹事が來 同
姉婿へ先手實費で呑むさきめ 白帆
見透ひた嘘は實費につりがつき 憲翠
別冊をへて實費で手を叩き 閑路
病院の實費喜ぶ國なまり 吞陽
くれるでもなく刷實の事なひ 水府
しみるゝ實費の薬呑んで生き 路郎
選
母さ子の蛋が互ひに入れかはり 水府
この蛋も榮養不長知つてゐる 路郎
お針子の蚤一疋へみんな立ち 柳骨
青煙蚤のさぶのも面白し 眠聲
ひろし

それそこにある蚤逃がす男親
 蚤一つ押へ小説讀み終り
 行儀よく座るに蚤で動かされ
 妻の里蚤がゐますなとも云へず
 人中で上から掻いた蚤の痕
 背の蚤上品な手が届きかれ
 仇討つ氣で一ツ身の蚤を見る
 母の愛散気で蚤をさる氣にて
 蚤さつたあさは大きく咳になり
 蚤取粉されてゐるかさ掃きよせる
 蚤一つ逃がしたまへて縫ひつゞけ

五客

閑路 赤城 白帆 源坊 突支坊 幸泉 彩陽 呑美 飯山 同 赤城 毒仙 一翠 蕨豆 萬よし かほろ 路耶 水府 助六 かほろ 英豆 一醉 眠聲 赤城 呑美 源坊

片道は圓タクで来て金を借り
 片道は寝て居りました雨が降り
 片道は前の切符で間に合し
 片道はきつちり傘がもちになり
 夏休み片道だけで戻つて来
 片道は途中下車して見て廻り
 片道の切符残つたまゝになり
 片道を歩くさしても大丈夫
 片道は乗替券を利用する
 片道を重い荷物で見送られ
 片道は國の規箴も一緒になり
 片道は歩くつもりも雨になり
 片道の電車賃だけ子は貰ひ
 梅雨晴の片道だけでぬれるなり
 片道は暮れるつもりで家を出る
 片道は馬も空荷さ知つて居り
 片道を買ふて嬉しい旅に立り
 女房は片道だけの切符買ひ
 片道のパスを丁稚は捨つて居り
 片道は荷物の傘に雨降り
 片道は歩き豫算が出来るなり
 片道は軽く仲仕の早い足
 片道を歩いて母はくたびれる
 片道を買へばよかつた人に逢ひ
 片道は歩くほごの日の永
 片道は富士山を見ぬ急な用
 片道は父が送つてゆく氣なり
 片道は地玉子だいじさうに持ち

鮎美 同 閑路 同 秋勝 同 舟々 同 醉夢 同 溪水 同 幸泉 同 ひろし 同 炭車 同 三笑 同 憲翠 同 白帆 同 飯山 同 路耶 同

髭をそるまもない急な旅に立ち
 申譯ほごに髭あるお父さん
 髭伸びて我が貧さを淋しがり
 饑湯で髭をそつてる日曜日
 代議士になつて髭だけもたらす
 長生さ一緒にあこのひげも伸び
 重役に髭の社員はかこまり
 可愛さが子供に痛い髭ですり
 髭などはやし友達儲けてる
 外交員喋べるさ髭がよく動き
 その中で髭を伸して棟梁なり
 病氣からそのまゝ髭を残ささき
 ごみ取や髭を生やしてごなつてゐ
 戸口調査異状がないにひげをなせ
 髭をそつたら年だけの年に見ぬ
 親父より息子の髭の伸びること
 髭をひれること古風さなりにけり
 髭だけを見てるさ長閑外史なり
 ほづておくから鮮人の髭は伸び
 人相を變へるつもり 髭を剃り
 手仕事をするさば見ぬぬ八字髭
 隨行の方が立派な髭を持ち
 髭伸びた顔を女は淋しがり
 髭剃つて妻の買物たのまれる
 漸く快方に趣き此の髭を剃り
 久し振り髭を延した事を云ひ
 四十二の厄から髭のにあふ顔
 髭も落して 鬮かうく
 髭おいた譯は自然に生ねて

選 赤城 源坊 憲翠 醉夢 九水 突支坊 呑美 炭車 秋晴 一醉 彩陽 柳骨 助六 ひろし 飯山 舟々 三笑 鮎美 萬よし 蕨豆 白帆 同 眠聲 同 赤城 同 呑美 同 源坊

附近へ吟行を試みることにいたしました。來會者が卅名で、寫真撮影に遇れた人々もあつてすこぶる盛會でした。この日路郎主幹が病後ではじめて出席された。この元氣だつたので、層の強みを感じました。紀行漫文は左に和田源坊君のものを繕ります。(朝陽生)

演寺支部(朝陽君)の主催、五月廿二日、煙草の喫める電車にお別れして、一行廿餘人が妙國寺へ、住持の一風ある説明に掛値の無い蘇鐵の壽命をきき、お茶を出された手前で賞めてをく。寶珠院では十一士の墓にそゞろ昔を偲び、漫談のうちの方違神社へきて、お賽銭を隙約する者もあり兎も角參拜して榊井陵へ急ぐ。

其處から大仙陵へ右折左曲して「マダカマダカ」の聲をききながら「アラリ」昭和彌次喜多よるしく足を運んだ。

流石御陵では冗談さへも途切れて、心から手を合す。さて此處の前の茶店で晝をやり、一時半出發したが、そろ／＼電車に乗りたいた弱音を吐く者が出來てきた、朝陽氏の道程比較をきいて遊々歩いてゐるのも、哀れの極み！やがて開口神社に到着、妻君の氣嫌さりに大寺餅を買ふ者や、鳩の糞にフン慨する者をやつと車中にして、いよ／＼大漢へ向つた

家族風呂に這入られるのかと思へば、御使用中の札を頼にさねながら普通浴場に浸る。それでも席へ戻つて汗を納めた時は、人間味が沸いた。涼風に吹かれて他所行きの顔を温泉の庭でカメラに入れ、再び席へ戻つて席題夏夏の披讀に移られた。席題は全漫放聞く丈

けて「途山雜感吟」に頂戴の聲をきき、低からぬ鼻を更に高うし、樂屋落川柳では一座臍の垢をきれいに掃除して、散會したのは湯も四海に没する頃であつた。(和田源坊)

吟行雜感

酔ふ程に御陵の前で飲めぬ酒
妙國寺見料だけで家根を葺き
みさ、きの隣の田甫肥を撒き
又一人あさからおがむ御陵前
御陵の前で捕ふて帽を脱ぎ
大阪の生れ胡瓜の珍しさ
御陵道青年團の勞をほめ
大寺は餅屋と同じ客を取り
いい年で大寺の鳩追ふてゐる
蘇鐵から説明をする妙國寺
大寺へ來て店のあるを知り
近道を穉夢の中に見つけ出し
買ひもせん／＼に又物を買つたり
忠烈へあん／＼少い墓／＼あり
餅の味みささき二つをがみけれ
これも旅大寺餅の一さつ、み
寶物のす、け壇家もないらしい
大寺餅分業といふ形で賣り
立札も蘇鐵の色に染まる寺
茶店の娘落した物を見逃さず
妙國寺ふさ腹巻に手が觸はり
腹切の話に空が曇つて來
堺へは泳ぎ以來の久し振り
方違さても便利な願所

寶珠院ほこりの中を覗かせる
妙國寺説明袴はいてゐず
はれつるべ泉州の野に生へてゐる
出戻つてからの蘇鐵は幅がき、
大寺でもまれてゐたははぐれて來
石一つ、是が割騰した所
陵へ堺あたり竹が鳴る
陵の前蛙啼き牛が啼き
妙國寺土佐の訛りの鼻高し
寶珠院フランヌ兵の墓もあり
蘇鐵寺腹の切り方まで傳へ
龍神へ廻らぬ客餅を買ひ
寶珠院墓はこちらにござります
夏
全菓を積んで枕にするも夏
カフエの門から夏になつてくる
親且那はだしで下りる夏の庭
囃らしいほこり足袋の白いこ
囃が道か土に夏が見立てるゐ
金魚屋の聲が曲ると竿竹屋
水泳衣のあさほつきりさ女風呂
朝顔が庭を占領してしまひ
夏と云ふ景色金魚が浮ひてゐる
この夏をこゝで住みたいた涼の風
一日で、こゝんなにやけた夏の顔
夏瘦を妻もさめるやうになり
金魚賣去年の得意尋れて來
涼み臺それにも息子あたまらす
涼臺さ大きく書いた留停所
よつほどの暑さに女房水を飲み
丸嚙に結ふて夏越すつもり

一 醉
秋 晴
彩 晴
眠 聲
點 美
ひろ 水
柳 骨
二 柳 子
朝 陽
醉 夢
炭 車
飯 陽
飯 山
同 萬 よし
同 一 路
同 か ぼる
同 源 坊
同 松 郎
同 松 雨
同 馬 行
同 舟 々
同 助 六
同 路 郎
同 雙 柳
同 明 六
同 醉 夢
同 彩 水
同 舟 々
同 吞 陽
同 萬 よし
同 眠 聲
同 一 路
同 二 柳 子
同 朝 陽
同 馬 行
同 舟 々
同 か ぼる

女客らしうむいでる夏みかん
曇らうか照らうが豆の葉のそよぎ
裏をあけて表をあけて夏になり
青葉青葉玉子を産んだそりがなき
割引で来た人ばかり夏の海
うざくかき聞きくシヤツを脱ぎ
女一人残してみんな貸浴衣

樂屋落

炭車と酔夢いづれ劣らぬ長い顔
松郎のマントだいぶんはけてゐる
子を貢ふと親父にみねる一路君
朝陽によその墓まで覗かされ
双柳は歸化したやうに髭を剃り
集金の型でカバンを持つ松雨
都々逸を例に秋晴よく話し
飯山子考證的の眉をよせ
飯山子凸が重たい歩きぶり
二柳子が立つたら會費かと思ひ
さにかくさにかくさ二柳子行届き
貴賓室へかほるきつちり坐つてゐ
宴會にまる萬でかほる死んだやう
かほるさんにかほるさんの聲を呼
バン三人前さば主幹らしくなし
出て来たが路那に日向ちまこたは
先生の疲れに長い夢畑
ステツキな持ち馬行のやうでなじ
淋しきは馬行女房を忘れて來
常識が馬行の若き押へつけ

松 郎
飯 山
路 郎
同 同

川柳 仁川句會

六月十二日 矢田右大臣報

席題「雲 助」 五 選
雲助のやうに表面丈けの奴
入墨の凄いのを賣る大井川
雲助は頭でれん分けて入り
雲助へ今日も昨日も富士が晴れ
入墨を見させて雲助威猛面
焚火をば丸く雲助客を待ち
廣重の畫に雲助も景になり
雲助の首が浮いてる大井川
席題「妓 生」 半頭子選
妓生を呼べば端然さとして座り
妓生を乗せて自動車得寛なり
日本語で妓生何にかからかはれ
妓生をさかみく美しく眺め
妓生をからかふ言葉分らない
妓生の日本歌に合はせてる
歌ほごに妓生内地語を知らず
妓生へ知つてる辭語みな使ひ
妓生の夜更け思はず唄が澄み
すれ違ふ妓生のみなすき通り
しつかさ踏みしめて妓生二人行き
湯突の香い妓生持つて來る
妓生へ微笑む丈けの客になり
朝鮮を見せるに妓用舞はせられ
席題「築港雜觀」 雨の介選
築港がかもめに廣い不景氣さ
築港の夜更け幽かな物の音
ウキソナチの音岸壁の騒しさ
柳葉子

間門へ来て眠が入る 不定期船
築港へ来たバラソルにみんなの眠
生活のこゝにも喘ぐチヤを見る
扱手でも出来そう間門を船が抜け
見學の一人入港寫して
降りて来た苦力乞食のやうな風姿
一錢の汗が地を這ふ船さ庫
築港へ忙しく機關車丈け走り
雨築へ涼みに来たは音もなし
雨はまだ止みず築港音もなし
ウキソナチ牛の一匹眼をつむり
席題「電話帳」 右大臣選
お隣りが又借りに來る 電話帳
口笛を吹いて電話帳をめくり
電話帳自動電話はしばし繰り
電話帳たしか電話があつたはづ
電話帳いそいで繰つて見當らず
電話帳から面白名を見つけ
誰もみなわからず電話帳を繰られ
電話帳主任へ手近なのか繰り
電話帳きぢんさ店も調ひて

紅短冊
同
同
半頭子
同
同
右大臣
同
同
同

川柳 松江句會

五月廿五日 奈夏井田坊報

五月雨生洲に鮎のはれる音
人間を嘲ける様な仁王尊
乳房を洋服はつきり見せて行き
泣いてゐやせぬかき云へば欠伸で
受合ふさ云つた西瓜へ腹が立ち
雑 吟
天痴人
仙坊
穂波
粹浪人
同

紅短冊
同
同
半頭子
同
同
右大臣
同
同
同

信心を背負て下りる 講 参り
 信心の利益が見ゆる 寄付の高 彩 秋
 ケーブルカー悠々として下つて来 同
 ケーブルに乗つたも國へ土産なり 同
 ケーブルで二次會がまだ繼らず 一路
 ケーブルは今にも止る音になり 同
 信心は何處で吞んだか酔ふてゐる 同
 信心も鳴さずケーブル羞なり 三 笑
 信心を別に登つた登山服 同
 ケーブルの車掌下見るだけの用 萬よし
 登山服信心連へ何か聞き 同
 命日の割に奥の院暇なやう 同

松江七日樂川柳會

五月十三日夜 奈良井仙坊報

無筆からせがれ親爺を馬鹿にする 粹 浪人
 漫畫家の筆に首相も弱つてる 仙 坊
 筆洗ふバケツの水へ輪を描き 同
 耳に筆かけて勤續二十年 變 牛
 先生の留守に大筆まれて見る 一 丸
 大衆を筆一本で笑わせる 仙 坊
 耳へ筆掛けて思案の首を垂れ 變 牛
 好い思案浮はず命も借りられず 粹 浪人
 名案も出す我が家をフイさ出る 變 牛
 こうすればよいと思案を切上る 一 丸
 思案した事も日記へ書いて置き 仙 坊
 浪人のながく瘦い腕を持ち 同
 深笠で浪人呑氣な尺八吹き 變 牛

やなぎ會小集

六月十日 河村桃哉報

白蝶氏が遊びに來られまして、路郎先生が
 御全快、また御轉宅されたことを喜ぶ、乍ら
 友の二題を作句した。

轉宅、祭

夏まつり揃への浴衣で二人出る 桃 哉
 乳くまで神輿をみせる宵まつり 同
 夏祭り奉公の子も戻つて來 刀 四郎
 祭からもの思ふ身さたりにけり 同
 お神輿のま近くなつたぞめきやう 同
 夕だちが暗れて祭の灯がこもり 同
 お神輿へ出し店少し慌てたり 其 象
 珍客へ見せる神輿の遅いこそ 同
 轉宅にもう男の子仲がよし 白 蝶
 宿誓の荷に鉢植の花が揺れ 同
 轉宅の日を極めるべくこよみ出し 桃 哉
 轉宅に大事におもさ提げて行き 同
 轉宅に算笥の置場考がへる 其 象
 轉宅の荷が落ちそなになつて着き 同
 片付かぬま、轉宅の夜は寝み 刀 四郎
 引越した荷物へ子供寄つてくゝ 同

第六回鼎座吟 (神戸)

五月三十日 小鏡千鳥報

砂煙りホースの水に狂ふよう 千 鳥
 打水、嘘、毒草 同
 打水の残りゝ犬へ浴せかけ 同
 不意打ちの水自轉車が足を揚げ 芳 香子
 不意打ちに白靴アツキ飛び上り 同
 水打つた丁稚はだして音を聞き 同
 打水の小さい杓がまだ止めず 同
 半分は嘘も混つて面白し 千 鳥

香具師の嘘外國なごを例にひき 同
 女親こんごそはへ出してやり 芳 香子
 悪智恵がついて近頃嘘を言ひ 同
 美しく咲いた毒草見て通り 千 鳥
 毒草の精一ばいに咲いて居り 同
 毒草の綺麗な花を子は惜しみ 芳 香子
 毒草へ残り惜しげな子供眼 同
 毒草も清い流れにそうて咲き 同
 美しく流るに陰に毒草伸びてゐる 同

鮎美居偶會

六月四日 大阪 水谷鮎美報

案山子君が拙宅を訪ふてくれたので、左の二
 題を作句しました。
 宿誓、年上、煩悶
 子が出來てのつびきならぬ宿誓し 案山子
 學校へ通ひますので宿誓し 同
 宿誓は風呂屋一番先に知り 同
 宿誓のまぶら神棚を吊つて酔ひ 同
 宿誓のそれから猫を飼ぬなり 同
 宿誓にくつすり寝込む父の顔 同
 年上は年上だけさ噂がし 案山子
 泣かすなぞ君は年でないかいな 同
 年上は圓タクで行くなよせき云ふ 同
 年上に一任をして行く無事にすみ 同
 足音はなやみの中に消えてゆく 案山子
 煩悶の霞のなかに包まれて 同
 煩悶にうごんへ七味たんさ入り 同
 煩悶に時計のねらは切れたまゝ 同

萬よし偶會 (大阪)

四月二十五日 庄萬よし報

編 輯 後 記

▼いよく六月八日に引越しました。二階の編輯室からさくろの花が蟹の爪のやうな赤い美しさを見せてゐます。尤もそれは餘所の花なのです。餘所の花は赤いさは、なるほどそれに違ひないと思ふと、私の眼に軽い微笑が浮きました。餘所の花をよるこんで眺めてゐることは貧しい者の特權であるかも知れません。水をやらなくて肥料をやらなくてすむので、誠に世話はない。諸君も一度來社されて、この赤い花を觀賞されては如何です。▼本號も又原稿が多くて盛りきれない。そこで、從來本社例會吟に三頁からも費してゐたのを各地柳壇に組入れて支部や地方の句會と、同じ扱ひにすることにしました。今後も本社の句會だけを特別に組む事は止さうと思ひます。粒々集も川柳塔に續けて發表することにしました。斯うした苦心と増頁をしても遺入りきらぬので、次號へ廻はしたものが少なくありません。▼十二日の日曜に、引越し直後のあと片づけをしてゐるころへ牛文錢氏が來訪され、各地の柳況を話し合つたりくだらない柳書までが、無闇に暴騰するので憤慨したりしました。▲川柳行脚中の蛭子省二氏は岐阜の小温泉に靜養されて

ゐましたが、十八日の夜の本社六月例會へ突然出席されました。散會後省二、水府、二柳子飯山、三笑、莢豆その他の方さ萬よしでビールを呑みながら話し合ひました。その夜は社で一泊されました。翌日はすぐに立つやうな話でありましたが、二柳子君ともう一度談り合ふために更に一泊をすゝめました。午後三笑、秋晴、萬よし、などの諸君が來社されたので、柳談に花を咲かせ、それから散歩がてら牛文錢氏を省二、萬よし、三笑の三君と共に萩の茶屋に訪ねました。二三十分話してから別れました。省二氏と牛文錢氏は初對面です。翌日省二氏は二柳子居を訪れ、その夜の汽車で松原、二柳子の兩君に送られて大阪を去られました。かつて重患の私を見舞つてくれたら、此詩人が私よりも弱々しい、肉體の持主であることを思ふと、長途の旅の健康を祈つて止みません。▼右大臣君は群山の句會へ出席されたさうです。其寄せ書による蘇南坊、松濱子、美福坊、百太樓、喜幸その他合して十人ばかりで盛會であつたらしいです。▼花童子君からリリーオアザザアレーを送つて貰つたが、ながく内地では暖かすぎて駄目と見ぬ、惜しいことには蒸せて少し腐つてゐました。尤もその面影は充分にう

かがへたので御厚意は深謝してゐます。▼二柳子君は六月の下旬に宮島の方へ忙しい旅をして來ました。歸つて來ても宮島のみならず、口に出さぬところが、二柳子君の面目を躍如たらしめてゐる。▼東京支部の同人の駒人君が六月廿日に母の國に歸つて、平塚で菓子屋を開店しました。▼耕水君から、近々來阪するやうな頼りがありました。▼駒井美の作君が同君の都合上同人を退くことになりました。▼藤園君の編輯してゐる天滿宮社報によると、本年は諒閣のために船渡御は御遠慮するさうです。▼北陸の新進桑島文絲君に輪島支部を、本田柳一路君に小松支部を南國の新鋭甲澤濁水君に、高知支部の面倒を見て貰ふことにしました。同方面の川柳家はよろしく、同君等を援助して「川柳雜誌」の發展を急速にして下さい。▼三條東洋鬼君が水い間の轉地療養から解放されて神戸に戻られたさうです。萬よし君の話ではながくい、からだになつてゐられるさか聞きました。川柳のためによるさぶべきことでありました。▼丹々、翠峯、新水の三君は六月十四日から四國、山陽地方にあそんで忙しい人達を羨ましがらせた。▲僕の健康が強弱前よりも寧ろ、よりよくなつたので、次々からもう活動して諸君の期待にそひます。(略)

投稿規定

- ▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。
- ▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」ミ封筒に朱記すること。
- ▼締切は嚴守されたし。
- ▼各地會報は清記のこと。
- ▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。
- ▼投稿其他につき御問合せすべて返信料封入のこゝ。

募 集

第四卷第九號課題

七月十日締切。
(各題二十句以内)

- ▼鑿 光 村 田 鯛 坊 選
- ▼稻 光 矢 田 右 大 臣 選
- ▼道 具 小 西 兔 絲 子 共 選
- 橋 本 二 柳 子 共 選

第四卷第十號課題

八月十日締切。
(各題二十句以内)

- ▼外 科 前 田 雀 郎 選
- ▼タイピスト 大 島 濤 明 選
- ▼少 年 三 條 東 洋 鬼 共 選
- 岩 崎 柳 路 共 選

每 號 募 集

- ▼近作柳壇(冊句以内) 麻生路郎選
- ▼各地柳壇(會報)
- ▼文章(評論研究吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に関する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

價 定

一 部 參 拾 錢
六 部 壹 圓 六 拾 錢
十二部 參 圓 (共稅郵)

料 告 廣

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は編輯口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます ▼御希望により集金郵便を差立てます▼御不在中でも預ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指が願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に関する御用件は個人宛にしない事

昭和二年六月廿五日印刷
昭和二年七月一日發行

第四卷第七號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 廠 生 幸 二 郎
發行所 大 阪 市 西 成 區 千 本 通 五 丁 目 七 番 地
 大 阪 市 西 成 區 千 本 通 五 丁 目 七 番 地
 川 柳 雜 誌 社
 振替大阪三五一四番

川 柳 雜 誌 社 事 務 所

大阪市港區八條通二丁目十二番地
振替大阪七五〇五〇番

賣 捌 書 店
(大阪) 明文堂 公立社 柳屋 和正堂 三笠屋
(東京) 仲見世 玉森堂 (神戸) 米田 後藤 (金澤) 石井
(函館) 石塚 (廣島) 金星堂 (石川縣小松) マコト屋

讀書子に告ぐ

今のやうにあさから〜新刊が出るゝ新刊を一々讀破することは容易ではない。たゞへ新本を買つてもいよく讀むころになれば、もう古本で至極新しい本が出てゐる。こゝうなればわざと新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新しい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新しい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にまつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちに幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことかわからう。

(路耶生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

清 酒

母親も白鶴ならこ一つ受け
恩給も近く白鶴樽で据ゑ



灘 津 攝

釀 社 會 名 合 納 嘉

岡田三面子・今井卯木・西原柳雨・山中共古・安藤幻怪坊各補説
武笠山椒釋
(最新刊行)

誹風柳樽通釋 三編

初編・二編 正價各金 參圓 送料各金 拾錢

全一冊四六輯
總布美本
正價金參圓
送料金拾錢

柳樽に盛られた川柳全句の平押し的通釋は 既にその初編二編を出して好評噴々今茲にその第三編を見るに至つた。山椒氏の甚深な造詣と輕妙な筆致とは更めていふ迄もない。殊に本編は前記斯道の五大家の補説を得て、いよいよ完璧のものとなつた。眞に權威的述作である。

東京市神田區
錦町一丁目

有朋堂

振替 口座
東京七一四八



非常に愉快に聴ける

貝印内外

レコード

御家庭の喜びは

このレコードから!!

一枚は一枚づゝ

笑ひが漲ぎる

レコードの花形!!



合資會社 内外蓄音器商會